

同志社大学人文学会『人文学』投稿 標題部6行，図版104：165

33字/行×26行/面×53面 =858字×53面 ≒400字/枚×113枚

和漢朗詠集旧御物卷子本の和歌表記の漢字

Chinese Characters in Writing of Japanese Poems of *Wakan-Rōeisyū*

石井 久雄

標題に言う旧御物卷子本は、かねて伝藤原公任筆御物と呼ばれてきたものである。下記佐佐木および小松の複製2点の解説によれば、永く仙台伊達家に伝わり、1901明治34年、天皇の伊達家行幸があつて、遷幸に際して当主・正四位伯爵宗基が献上したものである。小松が解説で推定するところによれば、1112天永3年前後に、世尊寺流藤原行成の曾孫、従五位散位藤原行実（生没年未詳）が筆写した。夙に倉田実・清水印刷所の印刷で

佐佐木信綱・尚古会『伝藤原公任卿筆 御物和漢朗詠集』1932年
として卷子2巻で写真複製され、近く、

小松茂美『古筆学大成 第十四巻 倭漢朗詠集 二』1990年、講談社に、「14 伝藤原公任筆 卷子本和漢朗詠集」と名づけられて収められている（全巻影印 pp. 50-99，解説 pp. 346-352。別に翻刻『第二十六巻 釈文』pp. 326-340）。小松影印以降は、山本（2005）も「卷子本」と呼ぶなどして、本稿標題もそれに倣っている。

この一書の、特に上巻の和歌の多くに、借訓が少なからず見られる。宣命書きのような文字の大小もある。すなわち、例えば36番歌は、仮名も漢字母で示すならば、次のようである。

明日唐^者若菜積止令之野^爾昨母今^毛雪^者雨管

他本で対応するものによってこれを読んで、全体を仮名のみで記し、あるいは今日的に漢字仮名交じりで記すならば、次のようである。

あすからは わかなつまむと しめしのに

きのふもけふも ゆきはふりつつ

明日からは 若菜摘まむと 標めし野に 昨日も今日も 雪は降りつつ
本稿は、字義とは一旦切り離され、かつ一音に対応するものを仮名として、
原文を次のように記す。原文の小字は片仮名とする。

明日唐ハ 若菜積と 令し野ニ 昨も今モ 雪ハ雨管

このように記したうちの漢字「明日唐若菜積令野昨今雪雨管」
について、「唐令今管」のような借訓を中心に、出現のしかたを眺め
てみようというのが、本稿の趣旨である。紙幅のおおかたは、事例を列挙
することに費やすことになる。なお、小字でハ行ウ列のものは出現してい
ないので、ハ行エ列のものを「フ」と記す。

この和漢朗詠集の借訓ないし漢字については、既に、浅見（1971）が、
上巻の和歌全部を字母の水準で翻刻しつつ、簡にして要を得た解説を済ま
せている。一節を引用する。

借訓仮名はかなり多彩で、中古真名本の一つの特徴である借訓仮名の
多様性の中核を示しているといえよう。 (p. 32)

本稿は、その浅見の整理を少少拡張したようなものである。浅見に先立っ
ては、山田（1957）が真名本の一典型としてこの和漢朗詠集を取り上げ、
後には、浅見自身が、（1982）で新撰万葉集・真名本伊勢物語と対比して
特色を明らかにしている。上の山本（2005）は、書風を検討して書道史に
位置づけている。借訓は、万葉集に見られ、真名本に引き継がれる。浅見
（1964）・浅見（1965）は、和漢朗詠集を取り上げる前に、新撰万葉集を
扱ったものである。上の浅見（1971）の引用は、次のように続く。

もつとも、助詞・助動詞の表記に用いられる文字は、既に新撰万葉集
に用例の見えるものが多く、此の書でもかなり固定的な用法を見せて
いる。 (同上)

池上（1953）は、この和漢朗詠集には触れないが、真名本一般および借訓

などをどのようにとらえるか、考えかたを示して山田（1957）以下に深く影響することになった。

1 和歌および文字の分量

和漢朗詠集旧御物卷子本は、和歌として上巻129首・下巻86首・合計215首を収める。この和歌は、粘葉本と比べると次の4首を欠いて、

17 みわたせば ひらのたかねに ゆきゝえて わかなつむべく
のはなりにけり

337 ゆふづくよ をぐらのやまに なくしかの こゑのうちにや
あきはくるらむ

603 このよにて 菩提のたねを うへつれば きみがひくべき
身とぞなりぬる

797 てにむすぶ みづにやどれる つきかげの あるかなきかの
よにこそありけれ

次の3首を具える。歌の直前の数字は新編国歌大観番号であり、17番歌および797番歌は、いま入れ換えとして措置する。

17 見度バ 桜柳ヲ こき交テ 郷ぞ春ノ 錦なりける

652の次 いかで猶 人にもとはむ あやしきは おもはぬなかの
えざるまじきを

797 よの中は ゆめかうつゝか うつゝとも ゆめともしらず
有てなければ

この17番歌は

630 見度ば 柳桜を こきまぜて みやこそ春の 錦成ける

が紛れ込んだと考えられ、重出となるが、そのままとする。このように一首全体が異なるほかに、諸本との細かい違いも多いが、立ち入らない。

漢字一覽 常用漢字表準拠排列, 数字は出現頻度

惡	1	覺	2	契	1	菜	3	女	3	昔	8	虫	3	波	4	万	1	漏	1	磯	1
嵐	4	隔	2	計	1	最	1	如	4	惜	4	著	2	馬	1	未	2	籠	2	笠	3
安	1	岳	1	経	3	在	2	小	4	積	3	長	4	梅	7	無	17	六	1	綾	5
暗	4	染	1	蚩	1	罪	1	少	2	折	6	釣	1	白	12	霧	6	麓	2	繫	1
衣	2	葛	3	景	3	作	2	松	10	雪	9	鳥	6	漠	1	名	3	之	3	而	4
依	1	刈	1	迎	1	昨	4	消	1	絶	1	朝	9	八	1	命	1	乍	1	擣	1
為	4	貫	1	隙	1	三	3	勝	6	千	8	澄	1	發	1	明	10	也	2	臥	1
移	2	寒	6	結	4	山	36	燒	1	川	7	通	1	髮	1	迷	1	云	8	荻	2
意	5	敢	1	月	19	算	1	上	4	先	2	鶴	5	晚	1	冥	1	亦	1	菩	1
一	6	間	4	見	43	残	3	乘	1	泉	1	定	1	飛	1	鳴	13	佗	1	菽	6
引	5	管	4	兼	4	子	5	城	1	淺	1	底	1	被	8	面	2	其	1	葦	1
陰	3	岸	1	絹	2	止	1	常	4	染	3	庭	1	悲	3	綿	1	卜	1	蓮	1
隱	4	氣	1	遣	1	四	1	情	1	扇	3	提	1	尾	2	目	3	叢	1	蕨	1
右	1	起	1	懸	4	糸	6	繩	1	船	1	程	1	眉	1	問	1	只	1	蟬	1
雨	14	帰	1	言	1	始	1	色	9	戰	1	摘	1	膝	1	夜	20	叶	1	蝦	1
浦	1	寄	1	限	1	枝	1	織	1	争	1	天	7	姬	2	野	19	吠	1	蟀	1
雲	4	幾	2	原	2	思	21	心	7	相	1	店	3	百	1	友	4	咎	1	臺	1
営	1	棄	1	己	1	指	2	身	4	草	5	田	3	氷	3	有	11	哉	1	蟋	1
影	5	菊	4	戸	6	寺	2	辛	1	送	2	伝	1	苗	1	猶	4	啼	1	袈	1
猿	8	吉	8	古	1	自	1	津	1	倉	1	殿	1	不	28	遊	2	塵	4	袴	1
遠	1	久	1	五	3	事	3	神	8	霜	6	徒	1	付	1	与	2	姑	1	褰	1
桜	9	旧	3	呉	1	持	2	振	1	增	1	都	1	負	1	餘	2	屐	1	裹	1
奥	1	宮	2	後	1	時	13	真	2	蔵	2	渡	2	敷	2	揚	1	嶺	1	趁	2
屋	8	給	1	語	1	鹿	8	深	2	足	1	度	3	風	17	葉	13	已	2	躑	1
憶	1	牛	1	誤	1	車	1	寢	10	村	1	冬	4	払	1	樣	1	幡	2	躑	1
音	4	去	1	公	2	者	39	審	2	多	3	燈	1	仏	1	欲	3	憑	1	逢	1
下	9	居	1	交	1	若	4	人	37	打	4	当	1	物	8	翼	1	摧	1	鉤	5
火	1	許	4	光	2	寂	1	尽	2	待	8	到	1	聞	10	羅	1	於	1	鉤	2
加	2	御	6	好	1	手	3	水	6	替	2	唐	3	並	2	来	5	曳	1	鍾	1
仮	1	共	1	行	8	主	2	吹	7	大	5	島	1	別	3	乱	1	杣	1	阿	1
何	12	郷	2	更	1	取	1	垂	3	代	2	桃	1	片	1	覽	9	栖	1	雁	8
花	35	橋	1	紅	6	狩	2	数	1	託	1	稻	1	辺	6	里	6	梢	1	霞	7
河	5	鏡	1	荒	7	珠	2	是	1	濁	1	藤	3	母	1	立	20	棲	2	霰	1
夏	9	驚	1	香	9	秋	31	井	1	達	2	同	1	暮	10	柳	6	棹	2	靱	4
家	2	曉	1	降	1	袖	2	世	12	脱	1	道	1	方	3	流	2	槿	2	駕	1
過	1	極	1	高	2	習	1	生	2	誰	7	独	2	法	3	留	1	橘	2	鴨	3
我	24	玉	5	告	3	十	1	成	14	短	1	南	4	峰	2	涼	3	檣	2	鶯	3
会	2	近	1	谷	7	住	1	声	9	綻	1	二	1	飽	1	緑	2	歟	7	鶯	3
皆	1	金	1	黒	1	重	2	青	3	男	1	句	2	木	10	令	1	此	1	々	4
開	1	琴	1	駒	1	従	5	星	1	段	1	入	31	僕	1	恋	6	漕	1		
解	3	錦	6	今	28	宿	1	清	2	断	1	忍	2	本	3	練	1	潭	1		
外	1	空	4	根	2	出	8	盛	1	知	10	熱	1	每	9	路	2	灑	1		
垣	1	遇	2	差	1	春	40	晴	3	置	9	年	20	妹	3	露	11	爰	1		
角	1	繰	3	妻	1	初	6	石	1	竹	1	燃	1	埋	1	老	1	碧	1		
郭	2	君	14	栽	2	所	1	赤	1	中	11					郎	2	磐	5		

漢字一覽	出現頻度	累積比率	漢字	比率は千分率%	右 () 内はその出現頻度の字数
1	43	23.1	見		(1字)
2	40	44.6	春		(1字)
3	39	65.5	者		(1字)
4	37	85.4	人		(1字)
5	36	104.8	山		(1字)
6	35	123.6	花		(1字)
7	31	156.9	秋 日		(2字)
9	28	187.0	今 不		(2字)
11	24	200.0	我		(1字)
12	21	211.2	思		(1字)
13	20	243.5	年 夜 立		(3字)
16	19	263.9	月 野		(2字)
18	17	282.2	風 無		(2字)
20	14	304.8	雨 君 成		(3字)
23	13	325.8	時 鳴 葉		(3字)
26	12	345.1	何 世 白		(3字)
29	11	362.9	中 有 露		(3字)
32	10	400.5	松 寝 知 暮		(7字)
39	9	458.6	桜 下 夏 香 色		(12字)
51	8	518.8	猿 屋 吉 行 鹿		(14字)
66	7	556.4	荒 谷 心 吹 川		(10字)
76	6	617.7	一 寒 御 萩 影 河 玉		(19字)
95	5	655.3	柳 意 嵐 常 陰 青 本 衣 指 著 麓 惡 岸 蚩 算 津 脱 到 弘 練 杣 袈		(14字)
108	4	726.3	如 小 上		(33字)
142	3	795.6	解 晴 妹 移 寺 渡 也 安 氣 迎 止 振 短 島 仏 老 栖 袈		(43字)
183	2	875.2	高 送 流 根 藏 緑 刈 琴 妻 繩 村 都 百 乱 摧 蝦		(74字)
257	1	1000.0	角 極 黒 乘 倉 伝 飛 様 姑 蕨		(232字)

和歌215首のうちで、短歌が213首、旋頭歌が次の下巻の2首である。適宜、訓みなどをくゝ内に私に注記する。

440 かのをかにはぎかるをのこ しかなかりそ
ありつゝも 君がきまさむ 御馬<みま>くさにせむ

732 ますかゞみ そこなる影に むかゐゝてみる
ときにこそ しらぬおきなに あふこゝちすれ

旋頭歌は、短歌に比べて五音句が一つ多いが、その差に止まり、またこの和漢朗詠集では歌数が少ないので、短歌と別に扱うことはしない。なお、短歌にも、上の17番歌・630番歌の重出を初めとして、衍字・脱字が見受けられるが、それもそのままに扱うこととする。

和歌を記した文字の分量は延べで5,026、うち漢字は異なりで489、延べで1,860である。漢字を、前の見開きに、二通りで一覧する。一つの一覧は、常用漢字表にあるものをその順序で排列して、その後、常用漢字表にないものをユニコードの番号によって並べ、「々」も漢字と見なして最後に置く。出現頻度を添える。いま一つの一覧は、出現頻度によって排列し、順位および累積比率を示す。漢字を一覧する当たっては、異体関係にあるものを整理している。

一首ごとに文字幾字・漢字幾字で記されているかを集計すると、次の表のようである。表の左上のあたりを読むならば、全部で215首あり、文字数17のものが3首あって、その3首は、右に見て、漢字数12のものが2首、漢字数9のものが1首である。文字数18のものは13首あって、漢字数14で1首、漢字数13で2首、漢字数12で5首、……、である。ところで、漢字数18あるいは17のものはそれぞれ1首あって、ともに文字数21である。漢字数15のものは5首あって、文字数19で2首、文字数22で2首、文字数23で1首である。……。のごとくである。表の下2行、すなわち文字数36あるいは37は旋頭歌である。

	漢字	18	17	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
文字	215	1	1	5	8	15	35	30	31	6	14	9	7	2	7	10	18	8	8
17	3	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18	13	-	-	-	1	2	5	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19	22	-	-	2	2	2	3	9	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
20	25	-	-	-	2	2	2	8	7	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-
21	30	1	1	-	1	5	10	3	5	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-
22	22	-	-	2	1	2	7	-	7	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
23	15	-	-	1	-	1	3	4	2	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-
24	16	-	-	-	1	1	2	2	4	1	2	2	1	-	-	-	-	-	-
25	9	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	2	1	1	-	-	-	-	-
26	8	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	3	-	2	-	-	-	-
27	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
28	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	5	2	-	-
29	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	13	-	-
30	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	5	-
31	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	2	7
32	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
36	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
37	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

文字数・漢字数の組み合わせには、二つの群がある。文字数25～26および漢字数7～6あたりを境界として、この表で左上と右下とに分かれるものである。表中に、そこから聊かずれながら、横線を2本引いている。本稿の初めに、借訓を含む一首を挙げたが、そうした借訓などは、実は、上巻129首の全体を覆うと見られはするものの、下巻では漸く1/4の22首前後に見られるといったものである。440番・732番旋頭歌に知られるように、抵抗感がなく受け入れられる漢字の遣いかた、あるいは仮名の遣いかたも存在し、そうした一群が、文字数・漢字数の表の右下に現れている。下巻の大勢64首に及ぶ。

下巻の大勢のほうを見ておこなうならば、これは、借訓も倒置もなく、小字もない、という条件で選んだものである。行書・放ち書きに対する草書・連綿である、という書風を踏まえるのが妥当であろうが、いまは漢字・仮名の数でのみ見る。全体的に、文字数が多くて漢字数が少なく、言い換えるならば仮名が多く、一首全体を仮名で記した、次のような8首もある。

451 わかのうらに しほみちくれば かたをなみ あしべをさして

たづなきわたる (文字数32)

漢字1字のみの和歌も、732番旋頭歌（文字数37）など8首である。漢字2字のものが、本文異同に挙げた652番次歌・797番歌（ともに文字数29）など17首あって、漢字数別では最も多い。

漢字が多いものは、本稿の主題とは違った訓み難さがあるように感じられる。当の64首のうちで漢字9字から最多15字までの4首を並べる。

623 我屋戸者くわがやどは 道も無くなきまで 荒にけり つれなき人を
待くまつとせしまに (文字数25 漢字数9)

428 我見ても 久くひさしく成ぬ 住吉の 岸の姫松 いくよへぬらむ
(文字数21 漢字数9)

586 木下くこのもとを 棲くすみかに為者くすれば 自くおのづから
花くはな見くみる人と 成にけるかな (文字数19 漢字数10)

585 大寺之くおほでらの 入会之金之くいりあひのかねの
声毎くこゑごとくに 今日も暮ぬと 聞くきくぞ悲しき
(文字数22 漢字数15)

585番歌2句「入会、金」は、借訓と考える余地もあるであろう。なお、本稿の主題を踏まえたとは言え、訓み難さについて条件の適否を判断し切れないところがあって、歌数を「前後」などと言うことになっている。

下巻で、訓むのに抵抗が感じられるとした22首のうちには、単に小字があるという条件によったものが3首ある。次の402番歌の「ゝ、」はくの字点であり、濁音で訓むので濁点を施している。

638 思ける 心許ハ さはらじを なに隔らむ 峰の白雲
(文字数20 漢字数7)

402 ほのゝ、ト 在明の月ノ 月影に 紅葉吹おろす 山おろしのかぜ
(文字数26 漢字数9)

553 ぬれ<右下で書入>ほす 山路の菊の 露の間三 如何<いかで>か

我者<われは> 世々を経ぬらむ (文字数25 漢字数12)

これらは、読み易いもののほうに近い。また、次の「神」「覧」は、万葉集でならば、多音節の訓仮名・音仮名として扱うところである。しかし、ここでは、定義上、仮名ではなく、借訓・借音の漢字であり、それぞれの一首全体も訓み難いとすることになる。適切でないかもしれない。

520 みな神<水上>に さだめてければ 君がよに ふたゝびすめる

ほりかはのみづ (文字数29 漢字数2)

469 琴のねに 峰の松風 かよふらし いづれのをより しらべ染覧

(文字数25 漢字数6)

上巻にもこの類はあって、次の小字や借訓に訓み難さは感じられない。

203 君が手に まかする秋ノ 風なれば なびかぬ草も

あらじとぞ思<おもふ> (文字数26 漢字数6)

207 打付<うちつけ>に 物ぞ悲しき 木の葉ちる 秋の始<はじめ>を

今日ぞとおもへば (文字数25 漢字数10)

上下巻全体を通しての文字数・漢字数に対して、上巻129首および下巻22首の合計151首で文字数・漢字数がどのようであり、また下巻64首でどのようであるか、数値を並べる。

文字延べ	全体	5026	151首	3195	64首	1831
漢字異なり		489		469		102
漢字延べ		1860		1655		205
一首あたり文字数		23.37		21.15		28.60
漢字数		8.65		10.96		3.20

文字数23~24・漢字数8~9という短歌は、全体の平均的な姿であると言ってよいように思えるが、漢字・仮名のありかたで全体が二群に分かれた、その二群が触れ合うところであり、平均と言うのにはすぐわないであろう。念のため、一首を示す。

111 春繰<来れ>バ し垂柳ノ まよふ糸ノ 妹ガこゝろに

乗にける匏<かな> (文字数23 漢字数8)

これに対して、151首での平均である文字数21・漢字数11のあたり、また64首での文字数29・漢字数3のあたりは、平均的な姿になっているであろう。文字数・漢字数の組み合わせで最も歌数が多いのは、151首で漢字数が一つ大きいところであり、64首で漢字数が一つ小さいところであって、それぞれから事例を一首ずつ挙げる。

251 水ノ面ニ てる月波を 算者<かぞふれば> 今夜ゾ秋ノ 最中成ける

(文字数21 漢字数12)

765 しばしだに へがたくみゆる よの中に うらやましくも

すめる月かな (文字数29 漢字数2)

下巻64首に出現して上下巻151首に出現しなかった、という漢字があり、異なり20字である。

之 (出現頻度3)

岸 気 久 金 遣 更 黒 自 住 石 赤 釣 島 道 二 馬 髪 老 漕

(以上19字、いずれも出現頻度1)

漢字「之」の出現は、64首で漢字数が最多であるとして既に引用した短歌におけるものであり、この一首に集中する。

585 大寺之 入会之金之 声毎に 今日も暮ぬと 聞ぞ悲しき

字母「之」のこのほかの出現は、全巻をとおして大字で52度、小字で3度であり、本稿の最初に紹介した短歌にも「令<しめ>しく之>野ニ」とあるように、専ら仮名「し」である。

下巻の64首について、漢字一覧および文字数×漢字数の表を示す。

下巻64首漢字一覧 常用漢字表準拠排列，数字は出現頻度

為	1	氣	1	戸	2	子	2	如	1	石	1	釣	1	年	1	本	2	猶	1	漕	1
隱	1	吉	3	光	1	思	1	松	2	赤	1	朝	1	馬	1	每	1	餘	1	笠	1
影	2	久	1	行	1	寺	1	心	5	昔	4	天	1	髮	1	無	1	里	2		
屋	2	御	2	更	1	自	1	神	2	千	3	田	2	悲	1	霧	1	立	3		
下	2	玉	1	荒	2	事	1	人	16	川	1	冬	2	姫	1	名	1	流	1		
何	1	金	1	告	2	時	3	吹	1	草	1	島	1	物	1	明	1	恋	1		
花	3	君	8	黒	1	者	2	世	6	待	2	道	1	聞	1	目	1	露	1		
我	7	月	2	今	5	住	1	成	2	大	3	二	1	別	1	夜	2	老	1		
会	1	見	2	在	1	出	1	声	1	中	7	日	7	暮	1	野	3	之	3		
岸	1	遣	1	山	6	春	3	清	1	著	1	入	1	木	2	有	4	棲	1		

下巻64首漢字一覧 出現頻度排列

比率は千分率‰
右 () 内はその出現頻度の字数

出現 順位	頻度	累積 比率	漢字	
1	16	78.0	人	(1字)
2	8	117.0	君	(1字)
3	7	219.5	我 中 日	(3字)
6	6	278.0	山 世	(2字)
8	5	326.8	今 心	(2字)
10	4	365.8	昔 有	(2字)
12	3	497.5	花 吉 時 春 千 大 野 立 之	(9字)
21	2	702.4	影 屋 下 春 御 千 大 野 立 之 告 子 者 松 神 成 待 田	(21字)
42	1	1000.0	為 冬 木 本 何 事 道 明 霧 寺 天 霧 島 名 明 目 猶 岸 出 入 猶 氣 如 年 餘 久 吹 馬 流 玉 声 髮 恋 金 清 悲 露 遣 石 姫 老 光 赤 物 棲 行 川 聞 漕 更 草 別 笠 黒 著 暮 在 釣 毎 思 朝 無	(61字)

漢字	15	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	
文字	64	1	1	2	1	2	5	2	7	10	17	8	8
19	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
24	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
25	4	-	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-
26	4	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-
27	2	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
28	9	-	-	-	-	-	-	1	1	5	2	-	-
29	16	-	-	-	-	-	-	-	1	3	12	-	-
30	8	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	5	-
31	13	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	2	7
32	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
36	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
37	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

2 高頻度の漢字

漢字が、正訓・義訓・借訓などで出現している様相を眺める。ここでは、全巻で出現頻度が大きいものを幾つか取り上げる。出現頻度・順位は全巻215首におけるものである。短歌の事例を列挙することを原則とし、差し当たって検討対象としている漢字は○に置き換える。

2.1 見 出現頻度43 順位1

すべて正訓であり、動詞「見る」に関係する。ただし同語ということではなく、動詞「見る」28件、それに由来する複合名詞後項「見」2件、動詞「見ゆ」11件、動詞「見す」2件である。語ごとの詳細は以下のようである。

動詞「見る」28件は、靡きがある活用形において、次のように、漢字が靡きをよく吸収している。

——終止形「見<みる>」1

294 槿を 何者か無と 思けむ 人をも花者 如何<いか>が○らむ

——連体形「見<みる>」7「見る」4

158 昨まで よそに思し あやめ草 今日我屋どの 妻と○飽<みる>かな

272 膝方の 雲の上にて ○菊者<きくは> 天つ星とぞ 被誤ける

281 女郎 ○に意<こころ>は なぐさまで 糸ど昔の 秋ぞ恋しき

306 段々の 錦とぞ○ 棹山の 母その紅葉 霧不立間者

316 ○人も 無テ塵ぬる 奥山の 紅葉者夜の 錦成けり

361 行年の 惜まるかな 増鏡 ○景<かげ>さへに 暮ぬとおもへば

586 木下を 棲かに為者 自 花○人と 成にけるかな

86 青柳ノ 枝に懸れる 春さ雨ヲ 糸持て貫ル 玉歟<たまか>とぞ○る

101 いろ香をば 思モ不入ズ 梅の花 不常世に よそへてぞ○る

340 さを鹿の 朝立小野ノ 秋萩に 珠<たま>と○ルまで 置白露

381 爰我 めづらしく○る 初雪を 吉野山は ふりやしぬらむ

——已然形「見<みれ>」1「見れ」1

258 天の原 ふりさけ○者<みれば> 春日なる 御笠の山に 出し月鴨

529 磯上 古都を 来而<きて>○れ者<ば> 昔か発 花開にけり

靡きがない活用形で、未然形「見」3、連用形「見」10（複合動詞前項を含む）、命令形「見よ」1である。挙例は省略する。

動詞「見る」に由来する複合名詞後項「見」2件は、「花見」1「方見<形見>」1である。

動詞「見ゆ」11件は、活用語尾「え」「ゆ」を吸収することがあり、しかし靡きを分離する。

——未然形「不見<みえ>ね」1「見え」2

28 春ノ夜 暗ハ綾無 梅の花 色こそ不○ネ 香やは隠ルヽ

94 我せこに見せむと思し梅ノ花 其軀<それとも>○えず 雪ノ雨れヽば

206 秋絹と 目庭さやかに ○えね友<ども> 風ノ音にぞ 被驚ぬる

——連体形「見<みゆ>る」3「見ゆる」1

149 我屋戸ノ 垣根ヤ春を 隔嵐 夏きにけりと ○る卯ノ花

259 白雲に 翼打かはし 飛雁の 景<かげ>さへ○る 秋の夜ノ月

293 不審 誰と歎知む 秋霧の 断間<たえま>に○る 槿の花

232 小倉山 麓ノ野辺ノ 花すヽき ほのかに○ゆる 秋木綿晩

他の活用形では活用語尾を分離し、連用形「見え」2、終止形「見ゆ」2である。

142 河津鳴 神並川に 景<かげ>○えて 今歎作嵐 山吹の花

343 川霧の 麓を籠て 立ぬれば 暗にぞ秋の 山者<やまは>○えける

8 春立ト 云許にや 御吉野ヽ 山モ霞て 今日ハ○ゆらむ

415 霞晴 碧空も のどけくて 有歎無歎に 遊<あそぶ>糸○ゆ

この415番歌の末句は粘葉本等で「あそぶいとゆふ」であるが、このよう

な諸本も伝わり、「遊糸」の訓がまとまって末尾2字に対したということになるであろう。その末尾2字を、ここでは「見る」と理解して、漢字を正訓のものとする。

動詞「見す」2件は、ともに未然形で助動詞「む」を伴い、この漢字は活用語尾「せ」を分離して「見せむ」である。

2. 2 思 出現頻度21 順位12

すべて正訓であり、動詞「思ふ」（複合動詞前項を含む）19件、名詞「思ひ」2件である。

動詞「思ふ」19件は、活用形で分けて未然形1・連用形（複合動詞前項を含む）9・終止形1・連体形6・已然形2であるが、それを表記する漢字は活用語尾を吸収し、すなわちその一字のみで動詞の全体を表記し、僅かに未然形・已然形各1件でのみ語尾を分離する。未然形・已然形の全3件は、次のようである。

56 今日而已ト 春ヲ○はぬ 時谷モ 立こと安キ 花陰川

58 亦モこむ 時ぞと○ド 不被憑ヌ 我が身ニし有バ 惜キ春鮑

219 一年に 一夜と○へど 織女の 遇見む秋ノ 無限かな

仮名主用の表記のうちでも、漢字が活用語尾を吸収していて、次は連体形である。

452 おほぞらに むれたるたづの さしながら ○心の 有気なるかな

なお、名詞「思ひ」2件も、漢字一字のみである。

191 裏友 不隠ぬものは 夏虫ノ 従身餘れる ○也<なり>けり

333 蟋蟀 いたくな鳴そ 秋夜の 長<ながき>○ハ 我ぞ勝

2. 3 立 出現頻度20 順位13

すべて正訓であり、動詞四段活用「立つ」（複合動詞前項を含み、また

連濁を伴った後項を含む) 19件, 動詞下二段活用に由来して連濁を伴った名詞「名立て」1件である。この漢字は, すべて, 活用語尾を吸収している。

動詞「立つ」19件は, 未然形1・連用形(複合動詞前項を含む) 8・終止形2・連体形(連濁を伴った複合動詞後項を含む) 8である。仮名主用の表記のうちでも漢字が活用語尾を吸収しているので, その3件を挙げる。終止形1, 連濁を伴った複合動詞後項の連体形2である。連体形の「先立つ」では, 直後に仮名表記も見られる。

693 たかきやに のぼりてみれば けぶり○ たみのかまどは
にぎはひにけり

652 おきなかの えざる時なき つりぶねは あまやさき○
いをやさきだつ

798 すゑの露 本のしづくや よのなかの おくれさき○ ためしなるらむ
なお, 名詞「名立て」1件は, 次である。

136 時はナル 松ノ名○に 無綾モ 懸れる藤ノ さきてちるかな

*

以上に動詞を中心として眺めた。漢字は, 靡きを含めて活用語尾をよく吸収している。

2. 4 春 出現頻度40 順位2

正訓で名詞「春(はる)」35件, 借訓で「遙けし」関係2件であり, ほかに地名で「春日(かすが)」3件である。

名詞「春(はる)」35件は, 単純名詞「春<はる>」28, 複合名詞「春霞<はるがすみ>」3「春風<はるかぜ>」2「春さ雨<はるさめ>」1「春べ」1である。単純名詞の直後は助詞が多く, 「の」12(うち小字6)「を」3(小字2)「に」2「は」2(小字2)「ぞ」1(小字1)合計20件で仮名表記であ

り、ほかに漢字表記で助詞2・動詞6合計8件である。直後が漢字表記である事例を並べる。

- 58 亦モこむ 時ぞと思ド 不被憑ヌ 我が身ニし有バ 惜キ○鉤<かな>
110 青柳ノ 糸ヨリ懸ル ○霜<しも>ぞ 乱て花者 綻にける
7 袖ひちテ 結シ水ノ 氷れるヲ ○立<たつ>今日ノ 風ヤ解覽
8 ○立<たつ>ト 云許にや 御吉野ノ 山モ霞て 今日ハ見ゆらむ
73 浅緑 ○立<たつ>そらに 鶯ノ 初声不待ヌ 人ハあらじな
62 桜花 ○加<くはは>れる 今年谷 人ノ情に 被足やはせぬ
111 ○繰<くれ>バ し垂柳ノ まよふ糸ノ 妹ガこゝろに 乗にける鉤
427 ときはなる 松の緑も ○繰者<くれば> 今ひとしほの 色勝けり

複合名詞で、「春」の直後が仮名表記であるものを挙げる。

- 86 青柳ノ 枝に懸れる ○さ雨<め>ヲ 糸持て貫ル 玉歟とぞ見る
664 なにはづに さくやこのはな 冬ごもり いまは○べに さくやこの花
借訓「遥けし」関係2件は次である。

- 601 極楽者 ○履<はるけき>程と 聞鹿ど 朝て到 所成けり
183 さ月暗 不審に 時鳥 鳴なる声ノ いとゞ○袈裟<はるけさ>

**** 春日 (かすが) 出現頻度3

この訓の種類は、「春日」全体で義訓とするのがよいと思われる。3件あって、そのうちの1件は「春日野」である。

- 77 昨こそ 年ハ暮鹿 春霞 ○○ノ山ニ はや立にけり
258 天の原 ふりさけ見者 ○○なる 御笠の山に 出し月鴨
442 やかずとも くさはもえなむ ○○野<かすがの>を たゞはるの日に
まかせたらなむ

2. 5 秋 出現頻度31 順位7

すべて正訓で名詞「秋（あき）」であり、単純名詞22件、複合名詞9件

である。

単純名詞「秋（あき）」22件は直後が助詞「の」15件であり、その助詞の表記は、仮名大字8・小字6、および漢字「秋」が吸収した1である。助詞「の」を吸収したものと、分離した一例とを示す。

333 蟋蟀 いたくな鳴そ ○〈あきの〉夜の 長思ハ 我ぞ勝

259 白雲に 翼打かはし 飛雁の 景さへ見る ○の夜ノ月

複合名詞9件は、いずれも「秋」が前項であり、後項も漢字で表記されている。「秋風」4「秋霧」2「秋萩」3である。

2. 6 夏 出現頻度9 順位39

すべて正訓で名詞「夏（なつ）」であり、単純名詞5件、複合名詞4件である。複合名詞は「夏虫」「夏山」「とこ夏ノ花」「常夏の花」である。

2. 7 冬 出現頻度4 順位108

すべて正訓で名詞「冬（ふゆ）」であり、単純名詞3件、複合名詞1件「冬ごもり」である。単純名詞の直後は助詞で、「の」2「ぞ」1であるが、「の」の一つは漢字が吸収している。助詞「の」を伴った2件を挙げる。

358 思兼 妹雁ゆけば ○〈ふゆの〉夜の 川風寒み 千鳥鳴なり

355 無神月 雨み不雨み 定無 し暮〈時雨〉ぞ○の 初なりける

*

出現頻度が小さいものも取り上げたが、頻度の大小によらず、助詞「の」を吸収したりしなかったりしている。

2. 8 者 出現頻度39 順位3

正訓で係助詞「は」26件と接続助詞「ば」12件とがあり、別に存疑の1件がある。

係助詞「は」は次に重出し、2件と数えるが、一方が衍である。

336 紅葉せぬ 常磐の山に 栖くすむ鹿○<しかは>鹿○<衍> 己鳴てや
秋を知嵐

接続助詞「ば」は、未然形に接続したもの2件、已然形に10件である。

ただし、直前の用言の活用語尾が仮名であるものは、未然形で2件ながら、已然形で3件に止まる。活用語尾が仮名でないということは、直前の漢字が活用語尾を吸収しているということであり、実際、靡きも吸収している。

123 世の中に 絶て桜ノ さかざら○ 春ノこゝろ者 のどけ唐猿

280 女郎 多る野辺に 宿<やどり>せ○ 無綾クあだの 名をや立南

139 思出ル 常磐ノ山ノ 磐躑躅 不云<いは>ね○こそ有れ 恋しき物ヲ

386 大空ノ 月の光し 寒<さむ>けれ○ 影見し水ぞ 先氷ける

529 磯上 古都を 来而<きて>見れ○ 昔か発 花開にけり

154 時鳥 鳴やさ月の 短夜も 独<ひとり>し寝○<ぬれば> あかし兼つも

251 水ノ面ニ てる月波を 算○<かぞふれば> 今夜ゾ秋ノ 最中成ける

258 天の原 ふりさけ見○<みれば> 春日なる 御笠の山に 出し月鴨

260 世に経○<ふれば> 物思年も 無けれ輒 月に幾度 長めしつ嵐

383 雪降○<ふれば> 毎木花ぞ さきにける 何を梅と わきて折猿

427 ときはなる 松の緑も 春繰○<くれば> 今ひとしほの 色勝けり

586 木下を 棲かに為○<すれば> 自 花見人と 成にけるかな

存疑1件は、次のものであるが、本文「紅葉者」の右傍に「社<もり>の木」とあり、他本に照らして本文のほうが独自異文である。当の一字を、直後の「葉は」に引かれたものとして助詞「者<は>」であると見ることもでき、また、直後との関係でくどくはなるが、「紅葉者」三字で「もみぢ葉」と見ることもできないではない。

315 無神月 与時雨共に 神並の 紅葉○の葉は 雨にこそ雨レ

助詞の正訓「は」「ば」の漢字「者」は、仮名主用の表記で出現するよ

うには想像し難いが、係助詞の次の1首、および上の接続助詞「ば」の1首586番歌が、条件によって下巻64首のうちに入ることとなった。

623 我屋戸○〈やどは〉道も無まで荒にけり つれなき人を待とせしまに

2.9 人 出現頻度37 順位4

すべて正訓で「人（ひと）」である。単純名詞33件、複合語4件である。

単純名詞の直後は、無助詞1件、助詞32件である。助詞は多彩で、表記されたとおりに見ると、「ぞ」3「と」1「鞆〈とも〉」1「に」4「には」1「にも」1「の」3「ノ」2「は」3「ハ」1「者〈は〉」1「も」4「モ」1「もがな」1「哉〈や〉」1「を」2「をも」1であり、さらにこの漢字が吸収した「の」1である。その吸収は次であり、分離しているものも添える。

173 五月待 花橘ノ 香を聞ば 昔ノ○〈ひとの〉 袖ノ香ぞする

62 桜花 春加れる 今年谷 ○〈ひと〉ノ情に 被足やはせぬ

なお、無助詞とした1件は次であり、それも助詞の一類であるとするならば、この漢字「人」が記す単純名詞「人」は、直後に助詞を随え、助動詞とは繋がらないということになる。

750 世中に あらましかばと おもふ○ なきはおほくも なりにけるかな

複合名詞4件は、「人伝〈ひとづて〉」1「人目〈ひとめ〉」1「あら人神〈ひとがみ〉」1であり、また連濁を伴った「大宮人〈おほみやびと〉」1である。

2.10 山 出現頻度36 順位5

すべて正訓で「山（やま）」である。単純名詞15件、複合名詞21件であり、この複合名詞の多さが、この漢字に関する特徴となるであろう。

単純名詞15件のうちに助詞「の」を吸収した1件があり、分離しているものとともに示す。

382 み吉野ゝ ○〈やまの〉白雪 積らし 旧里寒く 成勝なり

314 明日香河 紅葉流 葛城の ○の秋風 吹ぞ敷らし

複合名詞21件は、普通名詞18件および地名3件である。普通名詞は「山おろし」1「山がくれ」1「山川」1「山桜」2「山里」3「山路<やまぢ>」2「山鳥」1「山吹」1「八重山吹」1「山辺<やまべ>」1、および「奥山」1「外山<とやま>」1「夏山」1「御山<みやま>」1である。地名は「棹山」1「小倉<をぐら>山」1「吉野山」1であり、この「棹山」は佐保山であって、ハ行音転呼による仮名遣い上の異同があり、「棹」は借訓であることになろうかと思う。5.84「棹」を参照。

306 段々の 錦とぞ見 棹○<さほやま>の 母その紅葉 霧不立間者

2.11 花 出現頻度35 順位6

すべて正訓で「花（はな）」である。単純名詞28件、複合名詞7件である。

単純名詞28件のうちで、句末に立つもの12件、句末は当然に無助詞であるが、句末でない位置で無助詞であるもの7件である。この無助詞の多さは、この漢字の特徴であるよりは、この名詞のものであり、そのことは、664 なにはづに さくやこのはな 冬ごもり いまは春べに さくやこのの第2句末に「はな」とあることによって、端的に知られる。しかし、漢字もその特徴を引き継ぐ。次は歌末・句末・句頭の事例である。

165 涼哉と 毎叢 立寄ド 熱さぞ勝ル とこ夏ノ○

28 春ノ夜 暗ハ綾無 梅の○ 色こそ不見ネ 香やは隠ルハ

44 三千年に 生と云桃ノ 従今年 ○さく春に 遇にけるかな

また、助詞「の」を吸収することもあり、その事例。分離の事例も添える。

56 今日而已ト 春ヲ思はぬ 時谷モ 立こと安キ

○<はなの>陰川<かげかは>

85 桜雁 雨ハ雨絹 同者 ぬる友<濡るとも>○の かげに蔵む

複合名詞7件は、「花盛<はなざかり>」1「花すすき」1「花橘」2「花見」1「初花<はつはな>」1「桜花<さくらばな>」1である。

2.12 日 出現頻度31 順位7

正訓「日（ひ）」は6件，他は義訓21件，地名4件である。義訓の多さがこの漢字の特徴である。

正訓6は単純名詞1，複合名詞「朝日<あさひ>」1「月日<つきひ>」1「ゆふ日<夕日>」1および「子日<ねのび>」2である。単純名詞の事例は次であり，下巻の仮名主用表記のものである。

442 やかずとも くさはもえなむ 春日野を たゞはるの○に
まかせたらなむ

複合名詞「子日」については，2語であって，つまり単純語「日」がここにもある，という理解も成り立つであろう。事例を並べる。

31 子○する 野辺に小松の 無狩せば 千代の様に 何を引まし
33 子○しに ト鶴野への 姫小松 引でや千代 陰を待まし

義訓21件の多さは，特に「今日<けふ>」18件により，他は「何日<いくか>」1「明日<あす>」2である。「今日」「何日」については正訓とすることもできないではないが，「明日」ではできない。2.13「今」を参照。

地名4件は，「春日<かすが>」2「春日野<かすがの>」1「明日香河<あすかがは>」1である。2.4「春」の「春日（かすが）」および 5.71「明日香」を参照。

2.13 今 出現頻度28 順位9

この漢字単独で出現している用語は，正訓の「今（いま）」4件および義訓かと疑われる「今（けふ）」1件に止まる。ほか23件は，別の漢字と結合した，義訓のものである。

正訓「今（いま）」は、時間を意味しても、追加を意味しても、出現している。全4件を挙げる。

142 河津鳴 神並川に 景見えて ○歟<いまか>作嵐<咲くらむ> 山吹の花

332 ○欲来<いまこむ>と 誰たのめけむ 秋の夜を 明兼管 松虫の鳴

184 行やらで 山路暮しつ 郭公 ○一音<いまひとこゑ>ノ 聞ほしさに

427 ときはなる 松の緑も 春繰者 ○ひとしほの 色勝けり

次は「昨<きのふ>」との対比で出現したと思われるが、「昨<きのふ>」は正訓であるとしても、「今<けふ>」を正訓とするのは躊躇される。2.14「昨」を参照。

36 明日唐ハ 若菜積と 令し野に 昨<きのふ>も○<けふ>モ 雪ハ雨管

別の漢字と結合した23件は、「今日<けふ>」18「今年<ことし>」3「今夜<こよひ>」2である。

**** 今日 出現頻度18

すべて義訓「けふ」である。事例の引用は、特徴があるものである。

次は、直後の助詞が漢字であるものである。

56 ○○而已<けふのみ>ト 春ヲ思はぬ 時谷モ 立こと安キ 花陰川

390 山川ノ 右は勝れり 春風に 谷ノこほりや ○○哉<けふや>解覧

倒置の漢字を伴ったものがあり、漢字2字のまとまりを確認することができる。

32 千年まで 契し松も 従○○<けふより>は 君に被引て 万世哉経む

265 我屋戸の 菊の白露 毎○○<けふごとに> 幾夜積テ 潭と成覧

助詞「は」を吸収した事例がある。分離している一例も並べる。

600 五鹿と 於君と思し わかな姑 為法 ○○<けふは>曳鶴<ひきつる>

8 春立ト 云許にや 御吉野ノ 山モ霞て ○○ハ見ゆらむ

仮名主用表記の短歌のものも、4件ある。

461 わびしらに ましはなノきそ あしひきの 山のかひある

〇〇にやはあらぬ

569 春の田を 人にまかせて 我はたゞ はなに心を 著る〇〇かな

585 大寺之 入会之金之 声毎に 〇〇も暮ぬと 聞ぞ悲しき

649 たよりあらば 如何でみやこへ 告遣らむ 〇〇しらかはの
せきはこえぬと

**** 今年 出現頻度3

訓は「ことし」である。「年<とし>」は正訓でよいが、「今<こ>」が正訓であると認めるのが躊躇され、2字で義訓であると見ておく。倒置を伴うものが1件ある。

3 年ノ中ニ 春ハきにけり 一年ヲ こぞと哉云む 〇〇と哉云む

62 桜花 春加れる 〇〇谷<ことしだに> 人ノ情に 被足やはせぬ

44 三千年に 生と云桃ノ 従〇〇<ことしより> 花さく春に
遇にけるかな

**** 今夜 出現頻度2

訓は「こよひ」である。上の「今年」と同じく扱う。773番歌は、仮名主用表記であると見ている。

251 水ノ面ニ てる月波を 算者 〇〇ゾ秋ノ 最中成ける

773 うれしきは 昔はそでに つゝみけり 〇〇はみにも 餘ぬるかな

2.14 昨 出現頻度4 順位108

専らこの一字単独で出現し、正訓「きのふ（昨日）」である。漢字本来の用法である。

36 明日唐ハ 若菜積と 令し野に 〇も今<けふ>モ 雪ハ雨管

158 〇まで よそに思し あやめ草 今日我屋どの 妻と見鉤

77 〇こそ 年ハ暮鹿 春霞 春日ノ山ニ はや立にけり

571 〇こそ さ苗取鹿 五角間に 稲葉も戦と 秋風ぞ吹

2.15 不 出現頻度28 順位9

正訓として助動詞「ず」に關係して25件、「じ」に關係して1件、すべて倒置で出現する。しかも、その助動詞が仮名で直後に再度出現するというものが15件に及び、この漢字ないし助動詞の特徴となっている。倒置であるから、仮名主用表記の一群には關係しない。なおまた義訓として「不審（おぼつかなし）」で2件出現する。

助動詞「ず」25件は、活用形と表記とで整理すると、連用形「ず」で漢字のみである4、仮名でも記される3、連用形「で」で仮名でも記される1、連体形「ぬ」で漢字のみである7、仮名でも記される8、已然形「ね」で仮名でも記される2、ということになる。以下に全事例をこの順序で挙げる。

——連用形「不<ず>」7件。そのみ4、仮名「ず」も伴う3。

170 ねぎ事も ○聞<きかず>荒振 神達モ 今日はなごしと 人は云なり

229 秋者猶 ○只<ただならず>こそ 面吠れ 萩ノ上風 萩の下露

305 白露も 時雨もいたく 漏山者 下葉○残<のこらず> 色著にけり

355 無神月 雨み○雨<ふらず>み 定無 し暮ぞ冬の 初なりける

101 いろ香をば 思モ○入<いれ>ズ 梅の花 不常世に よそへてぞ見る

395 荒玉の 年モ尽れば 作けむ 罪も○残<のこら>ず 成哉しぬらむ

373 夜を寒み寝覚テ聞バ 鴛ゾ鳴 払<はらひ>モ○敢<あへ>ズ 霜ヤ置らむ

——連用形「不<で>」1件。仮名「で」も伴う。

131 桜ちる 木の下風は ○寒<さむから>デ 空ニ不被知ヌ 雪ぞ雨ける

——連体形「不<ぬ>」15件。そのみ7、仮名「ぬ」も伴う8。なお、用法は連体修飾12・準体3である。

101 いろ香をば 思モ不入ズ 梅の花 ○常<つねならぬ>世に

よそへてぞ見る

- 135 田子の浦に 底さへ匂ふ 藤波を か指て行む ○見<みぬ>人ノ為
153 夏ノ夜ヲ ○寝<ねぬ>に明ぬと 云置し 人はものをやおもはざりけむ
181 蓮葉の 濁に○染<そまぬ> 意持テ 何川露を 珠とあざむく
306 段々の 錦とぞ見 棹山の 母その紅葉 霧○立<たたぬ>間者
351 唐衣 打声聞ば 月夜好み 未だ○寝<ねぬ>人を 暗に知かな
401 秋風ノ 吹に託ても ○問飽<とはぬかな> 萩葉ならば 音者して猿
58 亦モこむ時ぞと思ド ○被憑<たのまれ>ヌ 我が身ニし有バ 惜キ春飽
73 浅緑 春立そらに 鶯ノ 初声○待<また>ヌ 人ハあらじな
74 鶯 声な雁セバ 雪○銷<きえ>ヌ 山里争で 春ヲ知猿
131 桜ちる 木の下風は 不寒デ 空ニ○被知<しられ>ヌ 雪ぞ雨ける
190 草深キ 荒たる屋どの 燈ノ 風に○消<きえ>ぬは 螢成けり
191 裏友 ○隠<かくれ>ぬものは 夏虫ノ 従身餘れる 思也けり
198 是を見ヨ 人も○咎<とがめ>ヌ 恋すとて ねを鳴虫ノ 成れるす方を
290 主○知<しら>ぬ 香者匂管 秋の野に 誰脱懸し 藤袴ぞも
——已然形「不<ね>」2件。仮名「ね」も伴う。

- 28 春ノ夜 暗ハ綾無 梅の花 色こそ○見<みえ>ネ 香やは隠ル、
139 思出ル 常磐ノ山ノ磐躑躅 ○云<いは>ね者<ば>こそ有れ 恋しき物ヲ
助動詞「じ」1件は、仮名「じ」も伴い、終止形である。

- 299 塵を谷 ○居<すゑ>じとぞ思<おもふ> 従栽 与妹我寝 常夏の花

**** 不審 出現頻度2

義訓「おぼつかなし」であり、語幹1件、準体用法連体形1件である。

- 293 ○審<おぼつかな> 誰と歎知む 秋霧の 断間に見る 槿の花
183 さ月暗 ○審<おぼつかなき>に 時鳥 鳴なる声ノ いとゞ春袈裟

2.16 審 出現頻度2 順位183

義訓「不審（おぼつかなし）」2件としてのみ出現する。2.15「不」の「不審」を参照。

2.17 我 出現頻度24 順位11

すべて正訓であり，代名詞「われ」7件，代名詞・主格助詞結合「わが」3件，連体詞「わが」13件，代名詞「わ」1件である。それぞれ一例を挙げる。

26 春ハ猶 ○にて知くしり>ぬ 花盛 意のどけき 人はあらじな

299 塵を谷 不居じとぞ思 従栽 与妹<いもと>○寝<わがぬる> 常夏の花

93 去シ年 根こじて栽し ○屋戸<わがやど>ノ 若木ノ梅ハ 花瓣にけり

58 亦モこむ 時ぞと思ド 不被憑ヌ ○が身ニし有バ 惜キ春飽

最終事例の「わ」は，代名詞としたが，連体詞の代名詞部分とするのがよいとも思われる。

なお，代名詞「わが」の一例として

157 ○駒と 今日に会くる 綾目草 生お暮るや 負なる覧

を数えたが，初句を「若駒」と理解するのが最近の通常であり，その理解に従うならば，この漢字は借訓で出現したことになる。

2.18 何 出現頻度12 順位26

正訓で「いづれ」2件，「など」1件，「なに」4件であり，義訓で「何日（いくか）」1件，「如何（いか）」関係4件である。2.19「如」を参照。

383 雪降者 毎木花ぞ さきにける ○<いづれ>を梅と わきて折猿

169 夏はつる 扇ト秋の 白露と ○<いづれ>か先者<まづは> 欲置ト覧

181 蓮葉の 濁に不染 意持テ ○川<などかは>露を 珠とあぢむく

031 子日する 野辺に小松の 無狩せば 千代の様に ○<なに>を引まし

294 槿を ○者<なには>か無<悲し>と 思けむ 人をも花者 如何が見らむ

- 396 計れば 我身に留る 年月を 送迎と ○<なに>営<いそ>グラむ
 640 命谷に 心ニ叶 物ならば ○<なに>か別<わかれ>の 悲しからまし
 **** 何日 出現頻度1
 211 秋立て ○○<いくか>もあらねど 此寝ぬる 朝けの風は た下寒霜

2.19 如 出現頻度4 順位108

義訓「如何（いか）」関係4件としてのみ出現する。

**** 如何 出現頻度4

直後に「が」または「で」を伴って「いかが」「いかで」であるが、「で」を吸収した「如何<いかで>か」という一事例もある。

- 294 槿を 何者か無と 思けむ 人をも花者 ○○<いか>が見らむ
 300 花に依 物をぞ思 白露の 置<おく>にも○○<いか>が 欲成らむ
 649 たよりあらば ○○<いか>でみやこへ 告遣らむ 今日しらかはの
 せきはこえぬと
 553 ぬれ<て脱>ほす 山路の菊の 露の間ニ
 ○○<いかで>か我者<われは> 世々を経ぬらむ

2.20 年 出現頻度20 順位13

正訓で「とし」14件である。それとの関係は明白であるが、単独で出現しないので正訓と言うのに躊躇する「とせ」5件である。さらに借訓「とし」1件、以上ですべてである。次の一首は、単純名詞「年<とし>」・複合名詞「今年<ことし>」および複合名詞「一年<ひととせ>」を含む。

3 ○<とし>ノ中<うち>ニ 春ハきにけり 一年<ひととせ>ヲ

こぞと哉云む 今年<ことし>と哉云む

——正訓「年<とし>」14件は、単純名詞8、接尾辞を伴った「毎年<としごと>」2、複合名詞「年月<としつき>」1「今年<ことし>」3である。単純名

詞の一例は3番歌にあり、「今年」は 2.15「今」に挙げた。ここでは「毎年」「年月」の事例を挙げる。

220 毎〇<としごと>ニ 逢とはすれど 店幡の 寝夜ノ数ぞ 少雁ける

639 毎〇<としごと>の 春のわかれを あはれとも 人に送るゝ人ぞ知る

396 計れば 我身に留る 〇月<としつき>を 送迎と何 営グラむ

——正訓としても義訓としてもよい「とせ」は、事例をすべて挙げる。3番歌のほか4首である。

219 一〇<ひととせ>に 一夜と思へど 織女の 遇見む秋ノ 無限かな

689 玉くしげ 二〇<ふたとせ>あはぬ 君がみを あけながらやは
あらむとおもひし

32 千〇<ちとせ>まで 契し松も 従今日は 君に被引て 万世哉経む

44 三千〇<みちとせ>に 生と云桃ノ 従今年 花さく春に 遇にけるかな

——借訓「とし」1件は、格助詞「と」と副助詞「し」との結合である。

260 世に経者 物思〇<ものおもふとし>も 無けれ鞞 月に幾度長めしつ嵐

3 助辞の吸収

漢字というよりはそれで表記されている語が、助辞類を吸収することがある。訓む側から捉えれば、読み添えということになる。ここでは吸収された助辞によってまとめる。

助辞類の吸収は、一般に、漢字と漢字との間に置かれたものに起こると考え、それに反する事例には一言した。この一言を積み重ねることができれば、助辞類の吸収に関する確実な発言ができることになる。なお、ここでは、用言の活用語尾は取り上げない。万葉集における築島裕（1984）などを踏まえつつ、また後代の状況なども見通しながら、別に構想したい。

事例の排列は漢字の常用漢字表に準拠し、関係する訓みを添える。→は、その項目を参照せよの符号である。

3.1 助詞「の」

3.1. 1 花 はな。

56 今日而已ト 春ヲ思はぬ 時谷モ 立こと安キ ○〈はなの〉陰川

3.1. 2 吉野 よしの。漢字「野」に対してよりは、この語としてのまとまりに対して格助詞「の」があり、吸収されていると見る。

381 爰我 めづらしく見る 初雪を ○○〈よしのの〉山は ふりやしぬらむ

3.1. 3 高天 たかま。

409 四十に而已 見而哉止南 葛木ヤ ○天〈たかまの〉山の 嶺の白雲

3.1. 4 山 やま。

382 み吉野ト ○〈やまの〉白雪 積らし 旧里寒く 成勝なり

3.1. 5 子曰 ねのび。「子」が「の」を吸収し、「子の日」で一語としてまとまる。格助詞「の」を仮名で見せる事例はない。

31 ○○〈ねのび〉する 野辺に小松の 無狩せば 千代の様に 何を引まし

33 ○○〈ねのび〉しに ト鶴野への 姫小松 引でや千代 陰を待まし

3.1. 6 秋 あき。

333 蟋蟀 いたくな鳴そ ○〈あきの〉夜の 長思ハ 我ぞ勝

3.1. 7 人 ひと。句末であるが、格助詞「の」を吸収する。

173 五月待 花橘ノ 香を聞ば 昔ノ○〈ひとの〉 袖ノ香ぞする

3.1. 8 世中 よのなか。「世」が「の」を吸収し、「世の中」で一語としてまとまる。事例の最初1首は和訓主用表記であるが、下の4首は仮名主用表記である。格助詞「の」を仮名で見せる事例が、和訓主用表記の1首にあるので、最後に添える。

611 ○○〈よのなか〉を 牛の車の なかりせば おもひの家を いかで出猿

733 いづこにか みをばよせまし ○○〈よのなか〉に おいをいとほぬ
人のなければ

- 750 ○○<よのなか>に あらましかばと おもふ人 なきはおほくも
なりにけるかな
- 764 ○○<よのなか>は とてもかくても おなじこと みやもわらやも
はてしなければ
- 796 ○○<よのなか>を なにゝたとへむ あさぼらけ こぎぬくふねの
あとのしらなみ
- 123 ○の○<よのなか>に 絶て桜ノさかざら者 春ノこゝろ者 のどけ唐猿
- 3.1. 9 千代 ちよ。句末で格助詞「の」を吸収している。
- 33 子日しに 卜鶴野への 姫小松 引でや○代<ちよの> 陰を待まし
- 3.1.10 代 よ。 →3.1. 9「千代」ちよ
- 3.1.11 中 なか。 →3.1.19「野中」のなか
- 3.1.12 天河 あまのがは。格助詞「の」を含んで一語であろう。一語化に当たって、露出形「天<あめ>」に対する被覆形「あま」が採られたということになる。事例の202番歌では「ハ」があり、語末「は」が重ねて記されたか、「河」が仮名と見られたか、理解できず、あるいは、小字であるので、他の理解のしかたがあるかもしれない。
- 201 ○○<あまのがは> 々辺涼キ 店幡ニ 扇ノ風を 猶やかさ猿
- 202 ○○ハ<あまのがは> 扇ノ風ニ 霧晴テ 空澄渡ル 笠さぎの橋
- 218 ○○<あまのがは> 遠キ渡ニ あらね輶 君が船出は 年にこそ待て
- 3.1.13 天 あめ。 →3.1. 3「高天」たかま
- 3.1.14 冬 ふゆ。
- 358 思兼 妹雁ゆけば ○夜<ふゆのよ>の 川風寒み 千鳥鳴なり
- 3.1.15 白露 しらつゆ。
- 420 暁の 無辛猿蝦蟇 ○○<しらつゆの> 起テ佗しき 別せ猿哉
- 3.1.16 法 のり。倒置がある「為法<のりのためにぞ>」で、「法」が格助詞「の」を吸収しているとするが見るが、「為」が直前の「の」を吸収して

いると見ることもできる。

600 五鹿と 於君と思し わかな姑 為〇<のりのためにぞ> 今日曳鶴

3.1.17 木下 このもと。助詞「の」を含んで一語であろう。一語化に当たって、露出形「木<き>」に対する被覆形「こ」が採られている。

586 〇〇<このもと>を 棲かに為者 自 花見人と 成にけるかな

3.1.18 夜 よ。格助詞「の」が句末であるが、その句末のものを吸収している。

28 春ノ〇<よの> 暗ハ綾無 梅の花 色こそ不見ネ 香やは隠ルハ

3.1.19 野中 のなか。吸収した助詞「の」の直後は、仮名で記されている。

748 いにしへの 〇〇<のなかの>しみづ ぬるけれど 本の心を
しる人ぞくむ

3.1.20 野 の。 →3.1.2「吉野」よしの

3.1.21 露 つゆ。 →3.1.15「白露」しらつゆ

3.1.22 碧 みどり。

415 霞晴 〇空<みどりのそら>も のどけて 有歟無歟に 遊糸見ゆ

3.1.23 磯上 いそのかみ。地名として、助詞「の」を含む一語であろう。

529 〇〇<いそのかみ> 古都を 来而見れ者 昔か発 花開にけり

3.1.24 萩 をぎ。

401 秋風ノ 吹に託ても 不問飽 〇葉<をぎのは>ならば 音者して猿

3.1.25 鶯 うぐひす。格助詞「の」が句末であるが、その句末のものを吸収している。

74 〇<うぐひすの> 声な雁セバ 雪不銷ヌ 山里争で 春ヲ知猿

3.2 助動詞

次のように、助動詞が吸収されている。

——助動詞「む」を漢字「積」が吸収し、訓「つまむ」である。

36 明日唐ハ 若菜〇<つまむ>と 令し野に 昨も今モ 雪ハ雨管

——助動詞「き」を漢字「栽」が吸収し、訓「うゑし」である。

299 塵を谷 不居じとぞ思 従〇<うゑしより> 与妹我寝 常夏の花

——助動詞「ぬ」を漢字「暮」が吸収し、訓「くれぬ」である。

277 山寂漠 秋も〇<くれぬ>と 告鴨 真木の毎葉に 置朝霜

——助動詞「り」を漢字「置」が吸収し、訓「おける」である。

277 山寂漠 秋も暮と 告鴨 真木の毎葉に 〇<おける>朝霜<あさじも>

340 さを鹿の 朝立小野ノ 秋萩に 珠と見ルまで 〇<おける>白露

——助動詞「り」を漢字「勝」が吸収し、訓「まされる」である。

333 蟋蟀 いたくな鳴そ 秋夜の 長思ハ 我ぞ〇<まされる>

3.3 義訓・倒置などで

以上に挙げたものは、正訓のものである。義訓で「今日<けふは>」、倒置に関係して「為<ために>」「毎<ごとに>」があるが、ここに纏めるほどには数がない。具体的な事例はそれぞれのところで記す。

4 義訓

義訓で出現している漢字を列挙する。義訓の和語に対応する漢語ないし漢字結合を、その最初の漢字により、常用漢字表準拠で排列する。

なお、「今<こ>」「年<とせ>」については、正訓とも判断でき、それぞれに 2.15「今」および 2.20「年」で一覧しているのに委ねる。

4.1 郭公 ほととぎす。「ほととぎす」はまた 4.9「時鳥」にもある。

155 夏ノ夜の 臥敷とすれば 〇〇<ほととぎす> 啼一声に 明るしのゝめ

184 行やらで 山路暮しつ 〇〇<ほととぎす> 今一音ノ 聞ほしさに

4. 2 御僕 みやつこ。

132 主殿ノ 友ノ〇〇<みやつこ> 意あらば 近来許 朝清めすな

4. 3 近来 このごろ。

132 主殿ノ 友ノ御僕 意あらば 〇〇許<このごろばかり> 朝清めすな

4. 4 五月 さつき。

173 〇月<さつき>待<まつ> 花橘ノ 香を聞ば 昔ノ人 袖ノ香ぞする

4. 5 紅葉 2種。

——もみぢ。315番歌は脈絡が整わず、諸本で「紅葉者」が「社<もり>の木」である。

306 段々の 錦とぞ見 棹山の 母その〇〇<もみぢ> 霧不立間者

315 無神月 与時雨共に 神並の 〇〇<もみぢ>者の葉は 雨にこそ雨レ

316 見人も 無テ塵ぬる 奥山の 〇〇者<もみぢは>夜<よる>の 錦成けり

336 〇〇<もみぢ>せぬ 常磐の山に 栖鹿者鹿者 己鳴てや 秋を知嵐

402 ほのゞト 在明の月ノ 月影に 〇〇<もみぢ>吹おろす

山おろしのかぜ

——もみぢば。

314 明日香河 〇〇<もみぢば>流<ながる> 葛城の 山の秋風 吹ぞ敷らし

4. 6 今日 けふ。 →2.13「今」の「今日」。そこに挙げなかったものを、次に並べる。

7 袖ひちテ 結シ水ノ 氷れるヲ 春立〇〇<けふ>ノ 風ヤ解覽

25 百敷ノ 大宮人ハ 仮有れや 桜か指て 〇〇<けふ>ハ暮<くら>しつ

35 明日からハ 若菜つませむ 片岳の 朝の原は 〇〇<けふ>ゾ焼める

146 花ノ色に 染した下ノ 惜ければ 衣替うき 〇〇<けふ>にも有かな

157 我駒と 〇〇<けふ>に会<あひ>くる 綾目草 生お暮るや 負なる覽

158 昨まで よそに思し あやめ草 〇〇<けふ>我<わが>屋どの 妻と見鉤

170 ねぎ事も 不聞荒振 神達モ 〇〇<けふ>はなごしと 人は云なり8

- 207 打付に 物ぞ悲しき 木の葉ちる 秋の始を ○○<けふ>ぞとおもへば
4. 7 今夜 こよひ。 →2.13「今」の「今夜」
4. 8 時雨 しぐれ。
- 305 白露も ○○<しぐれ>もいたく 漏山者 下葉不残 色著にけり
- 315 無神月 与○○<しぐれと>共に 神並の 紅葉者の葉は 雨にこそ雨レ
4. 9 時鳥 ほととぎす。「ほととぎす」はまた 4.1「郭公」にもある。
- 154 ○○<ほととぎす> 鳴やさ月の 短夜も 独し寝者 あかし兼つも
- 174 ○○<ほととぎす> 花橘ノ 香ヲ趁て 鳴は昔ノ 人哉恋しき
- 183 さ月暗 不審に ○○<ほととぎす> 鳴なる声ノ いとゞ春袈裟
- 185 さ夜深テ 寝覚ざりせば ○○<ほととぎす> 人伝にこそ 聞べ雁けれ
- 4.10 寂漠 さびし。
- 277 山<やま>○○<さびし> 秋も暮と 告鴨 真木の毎葉に 置朝霜
- 4.11 主殿 とのもり。
- 132 ○○<とのもり>ノ 友ノ御僕 意あらば 近来許 朝清めすな
- 4.12 春日 かすが、地名。 →2.4「春」の「春日」
- 4.13 女郎 をみなへし。漢字「花」を伴わずに出現する。
- 280 ○○<をみなへし> 多る野辺に 宿せ者 無綾クあだの 名をや立南
- 281 ○○<をみなへし> 見に意は なぐさまで 糸ど昔の 秋ぞ恋しき
- 4.14 如何 「いかが」「いかで」の一部分「いか」、また「いかで」全体。 →2.19「如」
- 4.15 織女 たなばた。
- 219 一年に 一夜と思へど ○○<たなばた>の 遇見む秋ノ 無限かな
- 4.16 何日 いくか。 →2.18「何」の「何日」
- 4.17 不審 おぼつかな、おぼつかなき。 →2.15「不」の「不審」
- 4.18 明日 あす。地名「明日香<あすか>」を記すには、この義訓を応用していることになる。→5.71「明日香」あすか

35 ○○<あす>からハ 若菜つませむ 片岳の 朝の原は 今日ゾ焼める

36 ○○唐<あすから>ハ 若菜積と 令し野に 昨も今モ 雪ハ雨管

4.19 遊影 かたみ。

278 暮テ行 秋ノ○○<かたみ>に 置物者 我本結ノ 霜にぞ有ける

4.20 而已 のみ。

56 今日○○<けふのみ>ト 春ヲ思はぬ 時谷モ 立こと安キ 花陰川

409 四十<よそ>に○○<のみ> 見而哉止南 葛木ヤ 高天山の 嶺の白雲

4.21 蟋蟀 きりぎりす。

333 ○○<きりぎりす> いたくな鳴そ 秋夜の 長思ハ 我ぞ勝

4.22 躑躅 つつじ。「磐躑躅<いはつつじ>」として出現する。

139 思出ル 常磐ノ山ノ 磐○○ 不云ね者こそ有れ 恋しき物ヲ

5 借訓・借音

借訓で出現した漢字を、常用漢字表準拠の排列で以下に見る。そもそも漢字として仮名に対置させたことからして、橋本（1966）に批判されるであろうが、さらに、「文字の素材性に拘泥して……妥当でない」（p.44）ことを承知で、借音すなわち多音節の音仮名をも混在させる。借音の項目を予め挙げるならば、次である。

5. 1「嵐」 5. 25「作」 5. 58「南」 5. 76「覧」

5. 82「履」 5. 92「鍾」

5. 87「蝦蟇」 5. 88「臺」 5. 89「袈裟」 5. 90「裟」

5. 1 嵐 らむ，助動詞「らむ」終止形・連体形。借音であり，漢字「嵐」はこの借音としてのみ出現する。

260 世に経者 物思年も 無けれ鞞 月に幾度 長めしつ○<らむ>

142 河津鳴 神並川に 景見えて 今歎<いまか>作○<さくらむ> 山吹の花

149 我屋戸ノ 垣根ヤ春を 隔○<へだつらむ> 夏きにけりと 見る卯ノ花

336 紅葉せぬ 常磐の山に 栖鹿者鹿者 己鳴てや 秋を知○くしるらむ

5. 2 暗 そら，名詞「空」。

343 川霧の 麓を籠て 立ぬれば ○くそらにぞ秋の 山者見えける

5. 3 右 みぎ，名詞「みぎは，汀」の一部分。

390 山川ノ ○くみぎは勝くまされり 春風に 谷ノこほりや 今日哉解覧

5. 4 猿 まし，助動詞「まし」終止形・未然形。漢字「猿」はこの借訓でのみ出現する。

——助動詞「まし」終止形。「ましかば……まし」の対応1件，他の仮定に対応した終止2件，疑問に対応した終止3件，単独の終止1件であり，次にはこの順序で掲げる。383番歌のものは，疑問「何くいづれ」に対応した終止と見るが，単独の終止であるとも見える。

420 暁の 無辛猿蝦蟇くなからましかば 白露 起テ佗しき

別くわかれせ○哉くましや

123 世の中に 絶て桜ノ さかざら者くば 春ノこゝろ者

のどけ唐○くからまし

401 秋風ノ 吹に託ても 不問鉋 荻葉ならば 音者くおとはして○くまし

74 鶯 声な雁せば 雪不銷ヌ 山里争くいかで 春ヲ知○くしらまし

383 雪降者 毎木花ぞ さきにける 何くいづれを梅と

わきて折○くをらまし

611 世中を 牛の車の なかりせば おもひの家を いかで出○くいでまし

201 天河 々辺涼キ 店幡ニ 扇ノ風を 猶くなほやかさ○くまし

——助動詞「まし」未然形。上の420番歌に，終止「まし」に対応する仮定「ましかば」で見える。ただし，次に項目を独立させもする。

5. 5 猿蝦蟇 ましかば，助動詞「まし」未然形および接続助詞「ば」。

漢字「蝦蟇」は漢語をそのまま記しているが，「猿」と結び付いて和語

「ましかば」を記したところで借音となった。「蝦」「蟇」それぞれを音

仮名として処理することができるかもしれないが、異様であろう。

420 暁の 無辛〇〇〇〈なからましかば〉 白露 起テ佗しき 別せ猿哉

5. 6 河津 かはづ，蛙。「津」はあるいは仮名であるかと思われる。

142 〇〇〈かはづ〉鳴くなく〉 神並川に 景見えて 今歎作嵐 山吹の花

5. 7 会 あひ，名詞「入相」の一部分。借訓と見るに及ばないかもしれず，次の一首を，1では，借訓をもたないものと扱った。→5.13「金」かね

585 大寺之 入〇之〈いりあひの〉金之 声毎に 今日も暮ぬと 聞ぞ悲しき

5. 8 角 →5.20「五角」いつの

5. 9 管 つつ，助詞。漢字「管」はこの借訓でのみ出現する。

36 明日唐ハ 若菜積と 令し野に 昨も今モ 雪ハ雨〇〈ふりつつ〉

78 春霞 たゝるやいづこ み吉野ノ 吉野のゝ山ニ 雪ハ雨〇〈ふりつつ〉

290 主不知ぬ 香者〈かは〉句〇くにほひつつ〉 秋の野に 誰脱懸し藤袴ぞも

332 今欲来と誰たのめけむ 秋の夜を 明兼〇〈あかしかねつつ〉 松虫の鳴

5.10 宮 みや，助詞「のみ」の一部分および助詞「や」。

125 見ての〇〈のみや〉 人に語覧 山桜 毎手折て 家づとにせむ

5.11 御 み，接頭辞「深」。

392 〇山〈みやま〉には 霰ふるらし 外山なる 真木の葛 色付にけり

5.12 玉 →5.23「荒玉」あらたま

5.13 金 かね，名詞「鐘」。借訓と見るに及ばないかもしれず，次の一首を，1では，借訓をもたないものと扱った。→5.7「会」あひ

585 大寺之 入会之〈いりあひの〉〇之 声毎に 今日も暮ぬと 聞ぞ悲しき

5.14 遇 あひ，接頭辞「相」。

219 一年に 一夜と思へど 織女の 〇見〈あひみ〉む秋ノ 無限かな

5.15 繰 くる・くれ，動詞「来」連体形・已然形。漢字「繰」はこの借訓でのみ出現する。動詞「来」の表記として →5.18「絹」きぬ

- 112 青柳ノ 眉に籠れる 糸なれば 春の〇<くる>にぞ 色勝ける
- 111 春〇<くれ>バ し垂柳ノ まよふ糸ノ 妹ガこゝろに 乗にける鉋
- 427 ときはなる 松の緑も 春〇者<くれば> 今ひとしほの 色勝けり
- 5.16 結 むすび・むすぶ, 動詞「掬ぶ」連用形・連体形。
- 7 袖ひちテ 〇<むすび>シ水ノ 氷れるヲ 春立今日ノ 風ヤ解覽
- 166 下くゝる 水ニ秋こそ 通らし 〇<むすぶ>泉ノ 手さへ涼キ
- 167 松陰の 磐井ノ水を 〇揚<むすびあげ>テ 無夏年と 思寝かな
- 5.17 兼 がね, 名詞「かりがね, 雁」の一部分。次の「雁<かり>」部分
は正訓とする。
- 324 秋風に 初雁〇<はつかりがね>ぞ 聞鳴 誰玉づさを 繫テ来つ覽
- 5.18 絹 きぬ, 動詞「来」連用形「き」および助動詞「ぬ」。漢字
「絹」はこの借訓でのみ出現する。動詞「来」の表記として →5.15「繰」
- くる・くれ
- 85 桜雁 雨ハ雨〇<ふりきぬ> 同者 ぬる友花の かげに蔵む
- 206 秋<あき>〇<きぬ>と 目庭さやかに 見えね友 風ノ音にぞ 被驚ぬる
- 5.19 懸 かか, 動詞「掛かる」命令形の一部。
- 86 青柳ノ 枝に〇れる 春さ雨ヲ 糸持て貫ル 玉歟とぞ見る
- 5.20 五角 いつの, 名詞「何時」および格助詞「の」。
- 571 昨こそ さ苗取鹿 〇〇間に 稲葉も戦と 秋風ぞ吹
- 5.21 五鹿 いつしか, 副詞「何時しか」。
- 600 〇〇<いつしか>と 於君と思し わかな姑 為法 今日曳鶴
- 5.22 荒 あら, 動詞「あり」未然形。
- 602 阿耨多羅 三藐三菩提の 仏達 我立杣ニ 冥加〇せ給
- 5.23 荒玉 あらたま, 枕詞。
- 72 〇〇<あらたま>ノ 年立帰ル 従朝 被待ル物は 鶯の声
- 395 〇〇<あらたま>の 年モ尽れば 作けむ 罪も不残ず 成哉しぬらむ

5.24 谷 だに，助詞。640番歌では，助詞末尾「に」を仮名で重ねて記す。漢字「谷」は，正訓「たに」で1度だけ390番歌に出現する。

- 56 今日而已ト 春ヲ思はぬ 時〇くときだに>モ 立こと安キ 花陰川
62 桜花 春加れる 今年〇くことしだに> 人ノ情に 被足やはせぬ
143 我やどの 八重山吹は 一重〇くひとへだに> ちり残ら南 春の方見に
284 移はむ 事〇くことだに>惜しき 秋萩を 折ぬ許も 置る露かな
299 塵を〇くだに> 不居じとぞ思 従栽 与妹我寝 常夏の花
640 命〇にくだに> 心ニ叶 物ならば 何か別の 悲しからまし
390 山川ノ 右は勝れり 春風に 〇く正訓たに>ノこほりや 今日哉解覽

5.25 作 さく，動詞「咲く」終止形。借音である。

- 142 河津鳴 神並川に 景見えて 今歟くいまか>〇嵐くさくらむ> 山吹の花

5.26 四十 よそ，名詞「外」。

- 409 〇〇くよそ>に而已くのみ> 見而哉止南 葛木ヤ 高天山の 嶺の白雲

5.27 糸 いと，副詞「いとど，甚」の一部分。

- 281 女郎 見に意は なくさまで 〇どくいとど>昔の 秋ぞ恋しき

5.28 指 ざし，動詞「かざす，挿頭」連用形の一部分。

- 25 百敷ノ 大宮人ハ 仮有れや 桜か〇くかざし>て 今日ハ暮しつ
135 田子の浦に 底さへ匂ふ 藤波を か〇くかざし>て行くゆか>む
不見人ノ為

5.29 寺 てら，助詞「がてら」の一部分。

- 124 我やどの 花見が〇くがてら>に 来人者 塵南後ぞ 恋し狩べき

5.30 時 とき，名詞「ときは，常磐」の一部分。

- 136 〇はナル 松ノ名立に 無綾モ 懸れる藤ノ さきてちるかな

5.31 鹿 しか，助動詞「き」已然形「しか」。なお，漢字「鹿」の借訓では，別に「五鹿」があり，→5.21「五鹿」いつしか

- 77 昨こそ 年ハ暮〇くくれしか> 春霞 春日ノ山ニ はや立にけり

- 571 昨こそ さ苗取○〈とりしか〉 五角間に 稲葉も戦と 秋風ぞ吹
- 601 極楽者 春履程と 聞○〈ききしか〉ど 朝て到 所成けり
- 5.32 狩 かり・かる，形容詞型カリ活用語尾連用形・連体形。漢字
「狩」はこの借訓でのみ出現する。なお，形容詞型カリ活用の借訓は，他に 5.35「辛」，5.55「唐」，5.90「雁」が関係している。
- 31 子日する 野辺に小松の 無○〈なかり〉せば 千代の様に 何を引まし
- 124 我やどの 花見が寺に 来人者 塵南後ぞ 恋し○〈かる〉べき
- 5.33 十 →5.26「四十」よそ
- 5.34 春 →2.4「春」の借訓「遙けし」の「春履〈はるけき〉」「春袈裟〈はるけき〉」
- 5.35 身 み，名詞「かたみ，形見」の一部分。
- 37 行て見ヌ人モ忍ベト 春ノ野の かた○〈み〉ニ摘〈つめ〉ル 若菜也けり
- 5.36 辛 から，形容詞カリ活用語尾未然形。
- 420 暁の 無○猿蝦蟇〈なからましかば〉 白露 起テ佗しき 別せ猿哉
- 5.37 津 あるいは単純に仮名であるかとも思われる。→5.6「河津」
かはづ
- 5.38 神 かみ，名詞「みなかみ，水上」の一部分。
- 520 みな○〈かみ〉に さだめてければ 君がよに ふたゝびすめる
ほりかはのみづ
- 5.39 振 ぶる，動詞「あらぶ，荒」連体形「荒ぶる」の一部分。
- 170 ねぎ事も 不聞〈きかで〉荒○〈あらぶる〉 神達モ 今日 はなごしと
人は云なり
- 5.40 寝 ぬる，助動詞「ぬ」連体形。
- 167 松陰の 磐井ノ水を 結揚テ 無夏年と 思○〈おもひぬる〉かな
- 5.41 成 なり，助動詞「なり」連用形，直後に助動詞「けり」が続く。
- 190 草深キ 荒たる屋どの 燈ノ 風に不消ぬは 蛍○けり

- 251 水ノ面ニ てる月波を 算者 今夜ゾ秋ノ 最中<もなか>○ける
- 316 見人も 無テ塵ぬる 奥山の 紅葉者夜の 錦○けり
- 601 極楽者 春履程と 聞鹿ど 朝て到 所○けり
- 630 見度ば 柳桜を こきまぜて みやこそ春の 錦○ける
- 5.42 晴 はれ，地名「いはれ，磐余」の一部分。
- 228 うづくら脱>鳴 い○の野辺の 秋萩ヲ 思人鞆 相見鶴かな
- 5.43 赤 あか，地名「明石」の一部分。
- 647 ほのゞゝと ○石<あかし>のうらの 朝霧に 島隠行ふねをしぞおもふ
- 5.44 川 かは，係助詞二つの結合。
- 56 今日而已ト 春ヲ思はぬ 時谷モ 立こと安キ 花陰○<かげかは>
- 181 蓮葉の 濁に不染 意持テ 何○<なにかは>露<つゆ>を 珠とあざむく
- 5.45 染 そむ，動詞「初む」終止形。
- 469 琴のねに 峰の松風 かよふらし いづれのをより
しらべ○覧<そむらむ>
- 5.46 送 おく，動詞「おくる，遅」連体形の一部分。
- 639 毎年の 春のわかれを あはれとも 人に○<おく>るゝ 人ぞ知ける
- 5.47 霜 しも，2種。
——副助詞。
- 110 青柳ノ 糸ヨリ懸ル 春○<はるしも>ぞ 乱て花者 綻にける
——形容詞語尾「し」および助詞「も」。
- 211 秋立て 何日もあらねど 此寝ぬる 朝けの風は
た下<たもと>寒○<さむしも>
- 5.48 足 あか，動詞「飽く」未然形。
62 桜花 春加れる 今年谷 人ノ情に 被○<あかれ>やはせぬ
- 5.49 村 むら，動詞「むらぎゆ，斑消」の一部分。次の「銷<きえ>」
は正訓と見る。

79 朝日差 嶺ノ白雪 ○銷くむらぎえ>テ 春ノ霞者 店引にけり

5.50 長 なが, 名詞「ながめ, 眺・詠」の一部分。

260 世に経者 物思年も 無けれ鞆 月に幾度 ○<なが>めしつ嵐くらむ>

5.51 朝 2種。

——つとめ, 動詞「努む」連用形。

601 極楽者 春履程と 聞鹿ど ○<つとめ>て到いたる> 所成けり

——あした, 地名「葦田」。

35 明日からハ 若菜つませむ 片岳の ○<あした>の原は 今日ゾ焼める

5.52 鶴 つる, 助動詞「つ」連体形。漢字「鶴」はこの借訓でのみ出現する。

33 子日しに ト○<しめつる>野べの 姫小松 引でや千代 陰を待まし

228 うづ鳴 い晴の野辺の 秋萩ヲ 思人鞆 相見○<あひみつる>かな

600 五鹿と 於君と思し わかな姑 為法 今日曳○<ひきつる>

681 山桜 飽まで色を 見○<みつる>かな 花ちるべくも かぜふかぬよに

789 いまこむと いひしばかりに なが月の 有明の月を

待出○<まちいでつる>かな

5.53 庭 には, 助詞「に」および助詞「は」。

206 秋絹と 目○<めには>さやかに 見えね友 風ノ音にぞ 被驚ぬる

5.54 天 あま, 名詞「あま, 海人」。

648 わたのはら やそしまかけて 漕出ぬと 人には告よ ○<あま>の釣ぶね

5.55 店 たな, 動詞「たなびく, 棚引」の一部分。次の「引くひき」は正訓と見る。

79 朝日差 嶺ノ白雪 村銷テ 春ノ霞者○引<たなびき>にけり

5.56 店幡 たなばた, 七夕。

201 天河 ヲ辺涼キ ○○<たなばた>ニ 扇ノ風を 猶やかさ猿

220 毎年ニ 逢とはすれど ○○<たなばた>の 寝夜ノ数ぞ 少雁ける

5.57 唐 から，2種。

——形容詞カリ活用未然形語尾。

123 世の中に 絶て桜ノ さかざら者 春ノこゝろ者 のどけ○猿

——助詞。

36 明日○〈あすから〉ハ 若菜積と 令し野に 昨も今モ 雪ハ雨管

5.58 南 なむ，2種。借音であり，漢字「南」はこの借音としてのみ出現する。

——助動詞「ぬ」未然形および助動詞「む」連体形。

124 我やどの 花見が寺に 来人者 塵○〈ちりなむ〉後ぞ 恋し狩べき

280 女郎 多る野辺に 宿せ者 無綾クあだの 名をや立○〈たちなむ〉

409 四十に而已 見而哉〈みてや〉止○〈やみなむ〉 葛木ヤ 高天山の
嶺の白雲

——終助詞「なむ」。

143 我やどの 八重山吹は 一重谷 ちり残〈のこ〉ら○〈なむ〉 春の方見に

5.59 年 とし，助詞「と」および助詞「し」。 →2.20「年」の借訓

5.60 燃 もえ，動詞「萌ゆ」連用形。

15 磐灑 垂水ノ上ノ さ蕨ノ ○出くもえいづル春に 成ニケルかな

5.61 波 なみ，形容詞「無し」ミ語法。

283 秋の野に 萩刈男 縄ヲ○〈なみ〉 練ヤねりその 摧てぞ思

5.62 発 ざしし，動詞「かざす」連用形の一部および助動詞「き」連体形。

529 磯上 古都を 来而見れ者 昔か○〈かざしし〉 花開にけり

5.63 眉 まゆ，名詞「繭」。

112 青柳ノ ○〈まゆ〉に籠〈こも〉れる 糸なれば 春の繰にぞ 色勝ける

5.64 膝 ひさ，枕詞「久方の」の初頭部分。

272 ○方の 雲の上にて 見菊者 天つ星とぞ 被誤ける

5.65 敷 しく，動詞「頻く」終止形。

314 明日香河 紅葉流 葛城の 山の秋風 吹くふきぞ〇くしくらし

5.66 母 はは，名詞「ははそ，柞」の一部分。

306 段々の 錦とぞ見 棹山の 〇そくははそ〇の紅葉 霧不立間者

5.67 暮 くる・ぐれ，2種。

——くる，動詞「おくる，遅る」連体形の一部分。

157 我駒と 今日に会くる 綾目草 生お〇くおくるるや 負なる覽

——ぐれ，名詞「しぐれ，時雨」の一部分。

355 無神月 雨み不雨み 定無 し〇くしぐれぞ冬の 初なりける

5.68 方 かた・がた，2種。

——かた，名詞「かたみ，形見」の一部分。

143 我やどの 八重山吹は 一重谷 ちり残ら南 春の〇見くかたみに

——がた，名詞「すがた，姿」の一部分。

198 是を見ヨ 人も不咎ヌ 恋すとて ねを鳴虫ノ 成れるす〇くすがたを

5.69 木綿 ゆふ，名詞「ゆふぐれ，夕暮」の一部分。漢字「木綿」を「ゆふ」に当ててゐることは義訓であるが，「夕」に結び付けたところで借訓である。

232 小倉山 麓ノ野辺ノ花すゝき ほのかに見ゆる 秋ノ〇〇晩くゆふぐれ

5.70 無 なし，形容詞「かなし，悲」終止形の一部分。

294 槿を 何者くなにはか〇くかなしと 思けむ 人をも花者如何が見らむ

5.71 明日香 あすか，地名。名詞「明日くあす」の限りでは義訓である。→4.18「明日」あす

314 〇〇〇河くあすかがは 紅葉流 葛城の 山の秋風 吹ぞ敷らし

5.72 鳴 なく・なる，2種。

——なく，助動詞「ず」ク語法。

239 六言も 未くまだ〇くつきなくに 明にけり いづら者秋ノ

長しと云夜は

——なる，助動詞「なり」連体形。

324 秋風に 初雁兼ぞ 聞○<きこゆなる> 誰玉づさを 繫テ来つ覽

5.73 面呔 おもほゆ，動詞「思ほゆ」已然形の一部。

229 秋者猶 不只こそ ○○<おもほゆ>れ 萩ノ上風 萩の下露

5.74 綿 →5.69「木綿」ゆふ

5.75 友 とも・ども，2種。

——助詞「とも」。

85 桜雁 雨ハ雨絹 同者 ぬる○<とも>花の かげに蔵む

——助詞「ども」。

191 裏○<つつめども> 不隠ぬものは 夏虫ノ 従身餘れる 思也けり

206 秋絹と 目庭さやかに 見えね○<ども> 風ノ音にぞ 被驚ぬる

5.76 覽 らむ，3種。借音であり，漢字「覽」はこの借音としてのみ出現する。

——助動詞「らむ」終止形・連体形。169番歌では，「欲置ト」を「置<お
か>」「欲<むとす>」と訓み，「ト」は「欲」の訓みの一部を重ねて記し
たと見る。

7 袖ひちテ 結シ水ノ 氷れるヲ 春立今日ノ 風ヤ解○<とくらむ>

265 我屋戸の 菊の白露 毎今日 幾夜積テ 潭<ふち>と成○<なるらむ>

324 秋風に 初雁兼ぞ 聞鳴 誰玉づさを 繫<かけ>テ来<き>つ○<らむ>

469 琴のねに 峰の松風 かよふらし いづれのをより

しらべ染○<そむらむ>

157 我駒と 今日に会くる 綾目草 生お暮るや 負<まくる>なる○<らむ>

169 夏はつる 扇ト秋の 白露と 何か先者 欲置<おかむとす>ト○<らむ>

390 山川ノ 右は勝れり 春風に 谷ノこほりや 今日哉解○<とくらむ>

——動詞「語る」未然形語尾および助動詞「む」終止形。

- 125 見ての宮 人に語〇<かたらむ> 山桜 毎手折て 家づとにせむ
 ——助動詞「ず」未然形「ざら」末尾および助動詞「む」連体形。
- 95 香ヲ趁テ 誰折ラざ〇<らむ> 梅花 綾無シ霞 立な隠しそ
- 5.77 令 しめ，動詞「しむ，標」連用形。
- 36 明日唐ハ 若菜積と 〇<しめ>し野に 昨も今モ 雪ハ雨管
- 5.78 六 むつ，名詞「睦言」の一部分。
- 239 〇言<むつごと>も 未だ鳴に 明にけり いづら者秋ノ 長しと云夜は
- 5.79 吠 →5.73「面吠」おもほゆ
- 5.80 塵 ちり，動詞「散る」連用形。
- 57 花も皆 〇<ちり>ぬる屋戸者 行春ノ 旧里とこそ 成ヌべらなれ
- 124 我やどの 花見が寺に 来人者 〇南<ちりなむ>後ぞ 恋し狩べき
- 316 見人も 無<なく>テ〇<ちり>ぬる 奥山の 紅葉者夜の 錦成けり
- 5.81 姑 をば，助詞「を」および助詞「は」。
- 600 五鹿と 於君と思し わかな〇<をば> 為法 今日曳鶴
- 5.82 屐 けき，「春屐」で形容詞「はるけし，遙」連体形「遙けき」の一部分。この漢字についての限りでは借音である。→2.4「春」の借訓「遙けし」の「春屐<はるけき，遙>」
- 5.83 幡 →5.56「店幡」たなばた
- 5.84 棹 さほ，地名「佐保」。古典仮名遣いで「さを」であるものが「さほ」に合流している。
- 344 為誰の 錦なれば歟 秋霧の 〇<さほ>の山辺<やまべ>に 立蔵らむ
- 306 段々の 錦とぞ見 〇山<さほやま>の 母その紅葉 霧不立間者
- 5.85 笠 かさ，名詞「かささぎ，鵲」の一部分。ただし，「笠<かさ>」は正訓かもしれない。
- 202 天河ハ<あまのがは> 扇ノ風ニ 霧晴テ 空澄渡ル 〇<かさ>さぎの橋
- 5.86 葦引 あしびき，枕詞。

238 ○○〈あしびき〉ノ 山鳥ノ尾ノ し垂尾ノ 長々し夜ヲ 独鴨寝む

5.87 蝦蟇 かば, 助動詞「まし」未然形および接続助詞「ば」の結合「ましかば」の一部分。この漢字についての限りでは純然たる漢語の表記であるが, 「ましかば」の一部分となったところで, 借音である。→5.5 「猿蝦蟇」ましかば

5.88 蟄 →5.5 「猿蝦蟇」ましかば, および5.87 「蝦蟇」かば

5.89 袈裟 けさ, 名詞「はるけさ, 遥」の一部分。この漢字についての限りでは純然たる漢語の表記であるが, 「遥けさ」の一部分となったところで借音である。→2.4 「春」の借訓「遥けし」の「春袈裟〈はるけさ〉」

5.90 袈 →2.4 「春」の借訓「遥けし」の「春袈裟〈はるけさ〉」および5.89 「袈裟」けさ

5.91 匏 かな・がな, 終助詞2種。漢字「匏」はこの借訓でのみ出現する。

——かな, 詠嘆の終助詞。

58 亦モこむ時ぞと思ド 不被憑ヌ 我が身ニし有バ 惜キ春○〈はるかな〉

111 春繰バ し垂柳ノ まよふ糸ノ 妹ガこゝろに 乗にける○〈かな〉

158 昨まで よそに思し あやめ草 今日我屋どの 妻と見○〈みるかな〉

401 秋風ノ 吹に託ても 不問○〈とはぬかな〉 荻葉ならば 音者して猿

——がな, 願望の終助詞。

285 秋の野の 萩の錦を 旧郷に 鹿ノ声乍 移くうつし〉てし○〈がな〉

5.92 鍾 しぐ, 名詞「しぐれ, 時雨」の一部分。借音である。

434 鍾〈しぐ〉れ雨〈ふる〉 音者すれども 呉竹の などよとゝもに

色も替らぬ

5.93 雁 かり・がり, 3種。なお, →5.17 「兼」がね

——かり (狩) 名詞「桜狩り」の一部分。

85 桜○<さくらがり> 雨ハ雨絹 同者 ぬる友花の かげに蔵む
——がり (許) 接尾辞「がり, 許」。

358 思兼 妹○<いもがり>ゆけば 冬夜の 川風寒み 千鳥鳴なり
——形容詞類カリ活用の語尾「かり」。

74 鶯 声<こゑ>な○<かり>せバ 雪不銷ヌ 山里争で 春ヲ知猿

220 毎年ニ 逢とはすれど 店幡の 寝夜ノ数ぞ 少○<すくなかり>ける

185 さ夜深テ 寝覚ざりせば 時鳥 人伝にこそ 聞<きく>べ○<かり>けれ

5.94 鞆 とも・ども, 2種。漢字「鞆」はこの借訓でのみ出現する。
——とも, 格助詞「と」および係助詞「も」。

94 我せこに 見せむと思し 梅ノ花 其○<それとも>見<み>えず 雪ノ雨
れゝば

228 うづ鳴 い晴の野辺の 秋萩ヲ 思人○<おもふひととも> 相見鶴かな
——ども, 接続助詞。

218 天河 遠キ渡ニ あらね○<ども> 君が船出は 年にこそ待て

260 世に経者 物思年も 無けれ○<ども> 月に幾度 長めしつ嵐

5.95 鴨 かも, 助詞2種。漢字「鴨」はこの借訓でのみ出現する。
——係助詞二つの結合。

238 葦引ノ 山鳥ノ尾ノ し垂尾ノ 長々し夜ヲ 独○<ひとりかも>寝む
——終助詞二つの結合。277番歌は係助詞二つの結合かとも思われる。

258 天の原 ふりさけ見者 春日なる 御笠の山に 出し月○<つきかも>

277 山寂漠 秋も暮と 告○<つぐるかも> 真木の毎葉に 置朝霜

6 倒置

倒置は, 漢字9字によって62箇所があり, 次のようである。

名詞・接辞・形容詞	助動詞	助詞
為<ため> 2箇所	被<くる>	8
		於<くに> 1

毎<ごと>	8	不<ず>	26	与<と>	2
無<なし>	7	欲<む>	3	従<より>	5

このうちの「不<ず>」については、2.15「不」で、助動詞「ず」「じ」も「不審」も、全事例を挙げた。他を以下に記す。

6.1 為

次の2件がある。600番歌では、助詞結合「にぞ」を吸収している。

- 344 ○誰<たがため>の 錦なれば歟 秋霧の 棹の山辺に 立蔵らむ
600 五鹿と 於君と思し わかな姑 ○法<のりのためにぞ> 今日曳鶴

漢字「為」を一書全体で見ると、倒置でない「ため」1件があり、

- 135 田子の浦に 底さへ匂ふ 藤波を か指て行む
不見人<みぬひと>ノ○<ため>

また動詞「す」もある。

- 586 木下を 棲<すみ>かに○者<すれば> 自 花見人と 成にけるかな

6.2 毎

次の8件がある。第4首で「ごとの」となるのを除いて、7首で「ごとに」である。「に」「の」は、上4首では、先に訓まれる語句の後に置き、下4首では吸収している。吸収について言うならば、「に」を吸収していること、句末のものであっても吸収していることが、目に着く。

- 277 山寂漠 秋も暮と 告鴨 真木<まき>の○葉<はごと>に 置朝霜
16 春風ニ 解ル氷ノ ○隙<ひまごと>ニ 打出波ヤ 春の初花
220 ○年<としごと>ニ 逢とはすれど 店幡の 寝夜ノ数ぞ 少雁ける
639 ○年<としごと>の 春のわかれを あはれとも 人に送るゝ人ぞ知る
125 見ての宮 人に語覧 山桜 ○手<てごとに>折<をり>て 家づとにせむ
383 雪降者 ○木<きごとに>花ぞ さきにける 何を梅と わきて折猿
165 涼哉と ○叢<くさむらごとに> 立寄ド 熱さぞ勝ル とこ夏ノ花
265 我屋戸の 菊の白露 ○今日<けふごとに> 幾夜積テ 潭と成覧

一書中には、倒置しない「毎」も、1件のみながら、ある。

585 大寺之 入会之金之 声〇<こゑごと>に 今日も暮ぬと 聞ぞ悲しき
なお、漢字「毎」の一書における出現は、以上ですべてである。

6.3 無

倒置は7件であるが、まず次5件を挙げる。第1首では「なし」の連用形活用語尾が仮名に現れ、第2首以下では、連用形・連体形を問わず、漢字「無」が活用語尾を吸収している。

280 女郎 多る野辺に 宿せ者 〇綾<あやな>クあだの 名をや立南

136 時はナル松ノ名立に 〇綾<あやなく>モ 懸れる藤ノ さきてちるかな

167 松陰の 磐井ノ水を 結揚テ 〇夏<なつなき>年<とし>と 思寝かな

326 春霞 立を見棄テ 行雁者 〇花<はななき>里<さと>に 棲ヤ習フる

219 一年に 一夜と思へど 織女の 遇見む秋ノ 〇限<かぎりなき>かな

倒置の他の2件は、次である。

315 〇神月<かみなづき> 与時雨共に 神並の紅葉者の葉は 雨にこそ雨レ

355 〇神月<かみなづき> 雨み不雨み 定無 し暮ぞ冬の 初なりける

漢字「無」は、この355番歌に「定無<さだめなき>」とあり、また

28 春ノ夜 暗ハ綾〇<あやなし> 梅の花 色こそ不見ネ 香やは隠ルハ

に「綾無」とあるなど、一書中では正置でも出現する。借訓も1件あって、

5.70「無」として挙げた。

6.4 被

漢字「被」の出現は、一書においてこの倒置の8件ですべてである。偶たまであろうが、前接する動詞が四段活用のものばかりであり、対応する助動詞も「る」に限定される。「る」は未然形2件・連用形4件・連体形2件であり、未然形・連用形で仮名に姿を出すことはないが、連体形では少しずつ出す。366番歌では、「るる」全部が仮名でも記されている。

58 亦モこむ時ぞと思ド 不〇憑<たのまれ>ヌ 我が身ニし有バ 惜キ春鉦

- 131 桜ちる 木の下風は 不寒デ 空ニ不〇知くしられ>又 雪ぞ雨ける
 32 千年まで 契し松も 従今日は 君に〇引くひかれ>て 万世哉経む
 62 桜花 春加れる 今年谷 人ノ情に 〇足くあかれ>やはせぬ
 206 秋絹と 目庭さやかに 見えね友 風ノ音にぞ 〇驚くおどろかれ>ぬる
 272 膝方の 雲の上にて 見菊者 天つ星とぞ 〇誤くあやまたれ>ける
 72 荒玉ノ 年立帰ル 従朝 〇待くまたる>ル物は 鶯の声
 366 埋火の下にこがれし 時よりも かく〇悪くにくま>るゝ 憶ぞわびしき

6.5 欲

漢字「欲」の出現は、一書において、この倒置の3件ですべてである。僅か3件であるが、和文との対応はそれぞれに異なる。すなわち、漢字「欲」が対応する和語は、332番歌で「む」であり、300番歌で「むとす」であり、それで確定してよいと思うが、169番歌で複雑に「む…す」であるらしく、定められない。

- 332 今<いま>〇来<こむ>と 誰たのめけむ 秋の夜を 明兼管 松虫の鳴
 300 花に依 物をぞ思 白露の 置にも如何が 〇成<ならむとす>らむ
 169 夏はつる 扇ト秋の 白露と 何か先者 〇置ト<おかむとす>覧

6.6 於

漢字「於」の出現は、一書において1件ですべてである。

- 600 五鹿と 〇君<きみに>と思し わかな姑 為法 今日曳鶴

6.7 与

漢字「与」の出現は、一書において2件ですべてである。

- 299 塵を谷 不居じとぞ思 従栽 〇妹<いもと>我寝<わがぬる> 常夏の花
 315 無神月 〇時雨<しぐれと>共に 神並の 紅葉者の葉は 雨にこそ雨レ

6.8 従

漢字「従」の出現は、一書において5件ですべてである。時間を指定するものが多いなかで、191番歌で空間を指定していること、また、時間の

指定であるが、299番歌で動詞句の準体法を用いていることが、気付くところである。

- 32 千年まで 契し松も ○今日<けふより>は 君に被引て 万世哉経む
44 三千年に生と云桃ノ ○今年<ことしより> 花さく春に 遇にけるかな
72 荒玉ノ 年立帰ル ○朝<あしたより> 被待ル物は 鶯の声
191 裏友 不隠ぬものは 夏虫ノ ○身<みより>餘<あま>れる 思也けり
299 塵を谷 不居じとぞ思 ○栽<うゑしより> 与妹我寝 常夏の花

*

本稿は、もともと索引のようなものを目指しているので、結論といったものはない。正訓を除いて、列挙すべきものは列挙し、必要な注記は加えられたと思う。しかし、正訓としたもののうちにも、漢字の用法として注意すべきことは残っている。

参考文献

- 浅見 徹 (1964) 新撰万葉集の用字 ——基礎作業として、助詞の
表記について。万葉学会, 万葉 51 pp. 24-43。
—— (1965) 借訓仮名の多様性 ——新撰万葉集の場合。
万葉学会, 万葉 57 pp. 37-46。
—— (1971) 伝公任筆和漢朗詠集の真名。
岐阜大学国語国文学 7 pp. 26-34。
—— (1982) 和歌の真名表記。
伊藤博・井出至編『小島憲之博士古稀記念論文集
古典学藻』塙書房刊 pp. 94-113。
池上 禎造 (1953) 真名本の背後。『漢語研究の構想』
1984年, 岩波書店刊 pp. 173-190。

小松 茂美 (1990) 古筆学大成 第十四卷 倭漢朗詠集 二。講談社。

佐佐木信綱・尚古会

(1932) 伝藤原公任卿筆 御物和漢朗詠集。

築島 裕 (1984) 万葉集の動詞の語尾表記について。

万葉集研究 12 pp.291-314。

橋本 四郎 (1966) 多音節訓仮名。『橋本四郎論文集 国語学編』

1986年, 角川書店刊 pp. 43-62。

山田 俊雄 (1957) 真名本の意義。

東京大学, 国語と国文学 34. 10 pp. 89-98。

山本まり子 (2005) 卷子本『和漢朗詠集』の位置。

日本大学, 語文 122 pp. 48-59。